

## 論文

### アマ論・再考

——海付きの村の生業論——

安 室 知

YASUMURO Satoru

#### はじめに

アマは日本の現代社会にとって特別な意味をもっている。とくに海女（女性のアマ漁師）は日本と韓国にしか存在しない固有の文化としてさまざまなメディアを通して喧伝されている。「海の生態系——海女の幸を残したい——」とは、2010年10月16日付朝日新聞の社説タイトルである（朝日新聞、2010）。その冒頭には「海女を世界文化遺産に」と言葉が踊る。この社説は、同年10月から名古屋で開催された国連生物多様性条約第10回締約国会議（コップ10）を多分に意識し、現代社会の問題として海女が激減していることと海洋環境問題を関連づけるものである。そして、「海を守り、貴重な文化を残す」ことを啓蒙している。そこでは、海女はすでに世界文化遺産として保全すべきものとなり、文化資源として海洋環境保全のアイコンとされている。しかし、本稿の問題設定はそこではなく、メディアに取り上げられるのは必ず「海女」であり、「海士」ではないことに、文化を扱う歴史研究として違和感を持ちつつ、その背景にあるものに注目するものである。

一般的にはアマとは人が水中に潜って魚介類や海藻を採捕する漁をいう。人は手に搔爬具や刺突具を持ち、磯根に棲息する魚介類（アワビ、サザエ、ウニ、ナマコ、イセエビ、タコなど）や海藻（テングサやワカメなど）を搔き剥がしたり突いたりして採る。ウェットスーツが一般の漁業者に普及する1970年代以前は、禪状のごく小さな水着を着けるのみで、上半身は裸であることが多かった。そのため、アマ漁のことを裸潜水漁ともいう<sup>(1)</sup>。

これまでの研究を見ると、日本においてアマ漁は研究対象として特異な存在であることがわかる。数ある漁法の中でも、アマ漁に関する研究は群を抜いて多い。さらに、研究分野も多岐にわたる。本稿が主たる方法論とする民俗学をはじめ、文献史学、文化人類学、地理学、文学といった人文系の学問、また社会学や経済学などの社会科学、さらには水産学、人類生態学、労働科学、医学・生理学といった自然科学の研究も多い。

そうした背景には、研究者の目を引きつける三つの前提がある。一つ目が、日本においては唯一といってよい女性に関与する経済性の高い漁であること。二つ目が、水底深く潜るという特殊技能を必要とする漁であること。三つ目が、アマ漁が古代から続くものであり、かつ日本人の生業を特徴づける漁法とされ、日本人の起源論や基層文化論と結びつけられる傾向が強いこと<sup>(2)</sup>。

つまり、アマの研究は、潜水という特殊技能を伴った女性による漁撈活動という前提のもとにおこなわれてきた。しかも、それはしばしば日本文化の根幹、日本人のルーツに関わるロマン溢れるテ-

マという暗黙の前提がある。しかし、そうした前提がじつはアマ研究を大きく制約してきたことは確かである。さらにそのことは研究上、磯漁を重要な生計活動の一つとしてきた海付きの村の生業を見誤らせることにもなったといえる。

本稿の目的は、近現代日本の海付きの村における生業の実態を明らかにするとともに、そのなかにおけるアマ漁の位相を究明することにある。

そのため、アマ漁だけを単独に論じることはせず、磯根地帯において生計維持の上で重要な意味を持つ磯漁全体に注目することとする。アマ漁を他の漁と区別し、特殊視しないがためである。また、そのことは、アマ漁の歴史的展開について再検討を迫るものとなる。本稿では、アマと記した場合は、漁法としての潜水漁を指すこととし、それに男女の区別をつけるときには、女性のアマを海女、男性のアマを海士と表記する。

なお、海付きの村における生計活動およびその中での漁の位置づけについては、別稿（安室、2011a・b）において実体概念としての「百姓漁師」に注目して、本稿と同じ調査地・同じ時間軸で論じているので参考にさせていただきたい。そこでは、三浦半島西岸の一村を調査地とし、1950年代という漁の機械化や船舶の動力化など漁業を取り巻く社会経済状況が大きく変化する高度成長期の前に時間軸を設定して民俗学的な聞き取り調査をおこなっている。

## 1. アマの研究史と問題点

### (1) アマ漁と女性

本論を展開する前に、もう少し詳しくアマの研究史について整理しておく。

アマ漁の研究が女性つまり海女に偏していたことは、早くはすでに瀬川清子が指摘している（瀬川、1970）。しかしそうした状況は基本的に現在も変わっていない。その一因として考えられるのが、比較的早くから進んだ海女の文化資源化の動きである。古代に続くとされる職能的な特殊性とともに、文化資源化（とくに観光資源化）される過程で、担い手は女性であることが過度に強調されてゆく。

文化資源化の例として有名なものには、古くは江戸時代の浮世絵師、喜多川歌麿の手になる浮世絵「鮑取り」がある。そこには赤い腰巻きに乱れた長髪、上半身裸の艶めかしい海女の姿が創作されている。そうした海女をモチーフとした半裸体の美人像は、現在、三重県鳥羽市の豊漁祈願祭として知られるシロング祭においてアワビを奉納する「美人海女」や、岩手県久慈市で北限の「美しすぎる海女」と報道され、ネット上で人気を博す海女のイメージと重なる。こうしたマスコミにより流布されるイメージはアマ自身に内包されたものではなく、明らかに外部からの性的で好奇な視線を反映している。

さらにそうした外部からの視線に呼応して、伊勢志摩をはじめ日本の各地で、海女が観光資源として地域おこしに用いられてゆく。いわゆる「観光海女」<sup>(3)</sup>が生み出され、観光客を前に海女により潜水漁の実演がおこなわれたりしている。こうした状況は韓国も同様である（宮本、1978）。

上記のような性的な好奇心をもってマスコミにより流布され、観光資源とされるアマはそのほとんどが女性である。当然、観光用のパンフレットやポスターに描かれる図像もほとんどが「海女」であ

る（磯本，2006）。また興味深いことに、それはオリエンタリズムに基づく、ある種の性的な好奇心を満たす被写体として第2次大戦後の西欧社会にも紹介されていく。たとえば、戦後アメリカにおいて中流家庭のリベラルな科学教養誌として知られる『ナショナル・ジオグラフィック』には日本の伝統的な生活風景として繰り返し取り上げられている（木暮，2009）。

そんなとき、被写体となるアマ漁地域では、観光地化が早かったところほど上半身への襦袢の着用が早かったとされる（木暮，2009）が、それは反面において、日本における海女の文化資源化が性的眼差しを伴うものであったことを端的に示している。

また、上記の問題と関連して、日本のアマ研究が海女に偏る背景として、海女の自己認識と他者表象の乖離にも触れておく必要がある。

海女の村として知られる福井県三国町安島において詳細な聞き取り調査をおこなった竹内由紀子の報告によると、「潜水漁に従事する女性たちは、必ずしも明瞭に“海女である”という自己認識を持っていない。潜水漁に従事することは“海に入る”と表現されることが多く、彼女らを“海女”と規定するのは、男性たちや潜水漁に従事しない人びとである。当人たちは、観光海女として勤めることを“海女になる”と呼ぶことが多い。」という（竹内，2002）。

この指摘は重要で、海女というのは当人にとっては他者表象に過ぎず、それを自覚するのは観光海女になったときだけであることを示している。アマ漁にとって女性か男性かという問題は、当人の自覚というよりは、むしろ他者からの位置づけにすぎない。この点は、先のオリエンタリズムの指摘と重なるところがある。

そうした海女の文化資源化の動きとはある意味対極にあるものとして、女性アマに関する医学・生理学分野の研究がある。海女の身体能力や海域への適応態について、『労働科学』『労働の科学』『産業医学』『体力科学』といった学術誌を舞台に、1920-1970年代にかけて盛んに研究されている。ここでは、身体測定、採血検査、労働計測による定量データをもとに、とくに女性が「過酷な」労働である裸潜水漁に従事することの意味が盛んに論じられている。

以上のように、従来のアマ研究は、海士と海女が峻別され、結果的に海士が無視される傾向にあった。それはとりもなおさず、過度に海女に焦点が当てられるがためである。当然のこととして、アマ漁をおこなうのは女性がすべてではない。日本においては女性の関与が強調されるがため、男性が従事することも多いことはあえて触れられないできた。

しかし、漁としては海女と海士はそれほどの違いはないことは明白で、一地域でありながら両者が併存する例も当たり前に見られる（煎本，1977）。また、海女の村とされていたところに、海士が増えていった例やその反対に海士の村に海女が出てきた例も報告されている（李，2008・2009）。

## （2）アマ漁＝特殊技能という見方

従来、アマの村の研究は、アマ漁＝特殊技能、アマ漁師＝職能集団という位置づけのもと、裸潜水漁に集中してきた。しかし、アマの村の漁撈は、後述するように、裸潜水漁に特化するものではない。網漁や見突き漁などいくつもの漁撈（採集も含む）が複合して生計活動となっている。それにもかかわらず、多くの研究は潜水漁を特別視し、それだけを抜き出すかたちでなされてきた。

たとえば、高桑守史は日本の伝統的漁民を類型化し、そのひとつに「アマ漁民」を設定する（高

桑, 1984). そして、それを特徴づける漁法を「潜水漁」としている。そのとき、アマ漁民とは別類型として「突き漁民」を設定しているが、実際のところ日本の海付きの村においては生計活動として潜水漁と突き漁とはセットでおこなわれることの方が一般的である。

さらにいうと、アマの村の生業の実態は、別稿（安室, 2011a・b）にて詳述したように、農耕や商業活動など多くの生業が複合して生計維持活動となっている。とくに聞き取り調査により民俗学的に明らかにできる段階のアマは、ほぼすべてが農業との複合生業において生計が維持されてきたといえてよい。また、農耕と同様に、とくに近代以降においては、海産物の行商や日雇い、出稼ぎ、民宿経営といった生業活動は生計維持のうえで無視できないものとなっている。

しかし、これまでの研究では他の生業活動は意図的に無視され、漁だけを単独で取り出しては、それをもってアマの村の生業としてきた。同様に、アマは漁業に特化した存在であり、日本における漁撈文化を代表するものとして扱われてきたといえよう。<sup>(4)</sup>

そしてまた、アマにおける特殊技能の象徴とされる潜水のあり方についても著しく偏った見方がされてきた。論文に限らずさまざまなメディアで紹介されるような水深 20 メートルにも及ぶ潜水、つまり身体能力の限界に挑むような潜水は、けっしてアマ漁のすべてではない。むしろごく一部の潜水漁のあり方に過ぎない。また、身体能力の限界近くまで潜るというのはアマの生活史の中では壮年期のごく短い期間であることが多い。

さらにもうひとつ、アマ漁が特殊視された背景として挙げられるのが漁獲物の問題である。これまでアマ漁ではアワビに象徴される高価な商品だけが取り上げられる傾向にあった。確かにアワビは他の魚介類に比べ格段に高い商品価値を持つ。と同時に、さまざまな漁法がある中で、アワビを捕る方法として潜水漁はもっとも有効な技術である。

しかしだからといってアマ漁の対象はアワビに限定されるものではない。アマ漁の漁獲物のうちオカズトリ（自家消費）の部分、つまりアマの家において日常の食卓に上る魚介類は最初から研究対象から除外されてきたといえてよい。その結果、アマ漁は商品価値の高いアワビに特化した漁のごとく扱われてきた。この点は、次に述べるアワビが延喜式の記述と短絡され、アマが朝廷に奉仕する職能民として位置づけられてきたこととも関連する。

### (3) アマと日本文化の起源論

アマは、3 世紀の日本を記した魏志倭人伝や日本でもっとも古い史料である古事記（712）、日本書紀（720）、万葉集（759）といった文献に登場する。また、古代の貢租を記録した延喜式（727）にはアマ漁の漁獲物のひとつであるアワビが取り上げられている。

そのため、現在のアマ漁が古代から続くものであり、かつ日本文化の根幹に関わっているという考えが研究者には所与の前提として存在していた。しかも、その前提は、多くの研究者にとってアマの研究を動機づけるものとなっていた（たとえば、宮本, 1964・田辺, 1990）。

また、古代から連綿と続く生業という前提により、アマ技術の特殊性がよりいっそう強調されてきたといえてよい。その結果、日本人の起源論ともアマの研究は結びついてゆく。たとえば、川喜田二郎はアマのイメージをもとに、「水界民」の概念（川喜田, 1987）を作り、日本人の原初的生計維持のあり方を説明しようとした。また、カール・サウアーの提唱する漁撈農耕文化（fishing-farming



culture) のイメージはアマと重なり、東アジアの農耕起源論と深く関わってくる（サウアー、1960）。

その結果、民俗学を含む広義の歴史学分野においては、アマ研究はたえず頑迷な先入観に支配された状態にあった。調査対象としては現代の潜水漁を扱ってはいても、研究者のまなざしは時代を大きく遡り、古代の職能民たる海人部や大和民族の起源を説く種族文化複合に向けられていた。

たとえば、民族学者の大林太良は魏志倭人伝に登場する「倭の水人」や記紀・肥前国風土記の「白水郎」を取り上げ、その伝統は後世の海女に受け継がれているとする。さらに「倭の水人」の文身（刺青）をもとに、日本のアマは中国の呉越に通ずるものとした（大林、1990）。事の真偽はおくとしても、こうした古代と現代との連想はやはり前提としてアマ漁を文化的に特殊視することに由来するといっていよい。

また、民俗学者の野口武徳は、漁村の発生を江戸時代以降のものとし、それ以前の漁業専門者のあり方として、「海女（海士）」と「家船」を挙げている。そして、それが古代の「倭の水人」や「白水郎」と系譜的につながるものかどうかは文献上では立証することは難しいとしながらも、海女（海士）・家船と「他の一般漁師」の生活様式とをくらべると、それは明らかな違いがあり、かつ前者は歴史的に古いものであるとしている。そのうえで、漁民の分類を試み、海女（海士）・家船を「純粹漁民」に位置づけた。こうした野口によるアマの位置づけも、一般漁業者との相違点に注目するもので、その存在を特殊化することで古代との連想を可能なものとしている。

こうしたアマを極端に特殊視しそれにより現行のアマを古代のそれと連関させる思考は、民俗学を含む広義の歴史学においては今だ多くの研究に見て取れる。本論ではそうした所与の前提や呪縛から<sup>(5)</sup>できるだけ解放された検討をおこないたいと考える。

## 2. 海付きの村の生業空間

### (1) 海付きの村、佐島

フィールドとして本稿で取り上げる海付きの村は、神奈川県横須賀市佐島（1950年当時、西浦村佐島）である。聞き取り調査における時間軸は基本的に1950年代（昭和20年代後半から30年代前半まで）つまり日本が高度経済成長に入る直前に置いている。それは、高度経済成長は生活革命と称されるほど人びとの日常生活を大きく変えたからである。漁業においても、船舶の動力化、漁の機械化が進み、アマ漁に関してもウェットスーツが普及するなどかつての裸潜水漁に革新的な変化をもたらしたといえる。したがって、以下に紹介する調査資料はとくに断りのない限り1950年代のものである。その時間軸を離れる場合には、その都度できる限り時間を明示することとする。

佐島は、北緯35度14分、東経139度36分、本州太平洋側の中程に位置する。三浦半島の西岸、相模湾に面する250戸（昭和5年国勢調査）ほどの海付きの村である（図1参照）。太平洋岸を北上する黒潮の影響を受け、年平均気温は15.8度と温暖な気候のもとにある。それを象徴するように、海浜植物のハマユウが自然群落を形成する北限地（1953年指定神奈川県天然記念物）として知られる。

佐島は、図1に示すように、集落から見て南側に海が開け、北側は集落のすぐ後ろに三浦半島の台



図1 佐島の立地（国土地理院5万分の1地形図）

地が迫っている。そのため集落は山と海に囲まれた隔絶した景観をなしている。そして、住民がヤマと呼ぶ台地状の傾斜地にヤト（谷戸）が切れ込んである。ヤトは浅い谷になっており、そこには小規模な水田が作られている。また、ヤマには畑が点々と拓かれている。そして、その傾斜地は三浦半島の最高峰である大楠山（標高242メートル）に続く。

集落南側に開ける海域は、地先に天神島や笠島、毛無島といった小島が点在する。また集落西には天神崎、南には小田和湾があり、出入りの多い複雑な地形をなしている。海岸には磯根の岩礁帯が広がるが、集落前や磯根の合間には砂浜もある。そうした複雑で多様な環境が佐島の海の特長であり、黒潮の影響を受けた温暖な気候と相俟って、生活文化の形成に多大な影響を与えている。

なお、佐島の生業や社会組織、信仰・儀礼等の概観については、別稿（安室，2008）にすでに示してある。したがって、本稿に掲載した図版およびデータは一部重複していることを断っておく。

## （2）海付きの村の生業空間（概観）

海付きの村は、漁だけで生計が成り立っているわけではない。そのため「漁村」ではなく「海付きの村」とした。佐島をはじめとする三浦半島の海付きの村では、その暮らしを「オカハマ」と表現する。オカは農、ハマは漁を象徴する。そして、そこに暮らす人々は自らを「百姓漁師」と称している（安室，2011a・b）。

海付きの村の生業空間は、図2に示すように、オカ（陸）とウミ（海）に大別される<sup>(6)</sup>。オカは海に近いところからムラ（集落）、ヤト（水田）、ヤマ（畑、山林）となる（安室，2008）。またウミは岸に近い方からキワ（際）、オキ（沖）、ダイナンとなる。さらにキワはイソ（磯）、ネ（根）、ハマ（浜）に区分され、それぞれの環境に対応した磯漁がおこなわれる。またオキでは一本釣りのような

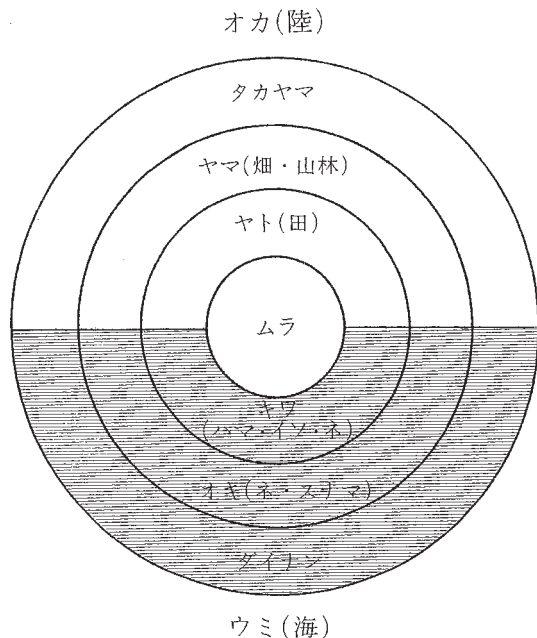


図2 海付きの村の生業空間（概念図）

沖漁がおこなわれているが、通常はダイナンまで漁に出ることはない。ダイナンとは、沖に船で漕ぎ出したとき陸地が見えなくなる先をいう。手漕ぎの小船にとっては、風や潮が強くなると陸上の目標物もないため方向を失いやすい危険なところとされ、住民の認識として「大難」の字が当てられる。

磯漁は漁業として大規模化することは難しく、そのため多様な小漁が日常的・自給的・個人単位でおこなわれてきた。キワは海付きの村の住民にとっては磯漁を通して日常的に関わり合うもっともなじみ深い海域である。そのため、図3に示すように、キワには陸上以上に多くの地名がつけられている。利用の頻度が高く、漁撈採集行動を通して民俗知や自然知が集積されたところほど、環境認識の度合いは高まり、地名は詳細なものになる（安室，2008）。

### (3) 百姓漁師の生業

磯漁のように多くが自給的活動に止まる生業活動はその生産量は記録に残りづらい。そのため、これまでの歴史研究では無視されるかまたは過小に評価されてきた。そのため、耕地の少ない海付きの村では、漁業や海運業に特化した村でもない限り、そこに暮らす住民は非常に貧しい“農民”と考えられてきた。

佐島村（現横須賀市）は、明治3年（1870）の村明細帳では、家数が180戸に対して、村高172石で、田8町2反、畑20町8反の耕地しかない。住人のうち174戸が「農」で、ほかに「商」6戸、「工」として農間稼ぎの諸職3戸（石工1戸、船大工1戸、桶屋1戸）があるのみである。しかも、「農」のうち、上農2戸、中農26戸に対して、下農は146戸となっている。漁撈がおこなわれたことをうかがわせる記述はわずかで、「船持ち」が61人いたことと、田畑の肥料に藻草を採集していたことがあるのみである（青山，1987）。明らかに村明細帳に描かれるのは、1戸あたり田0.5反、畑1.2

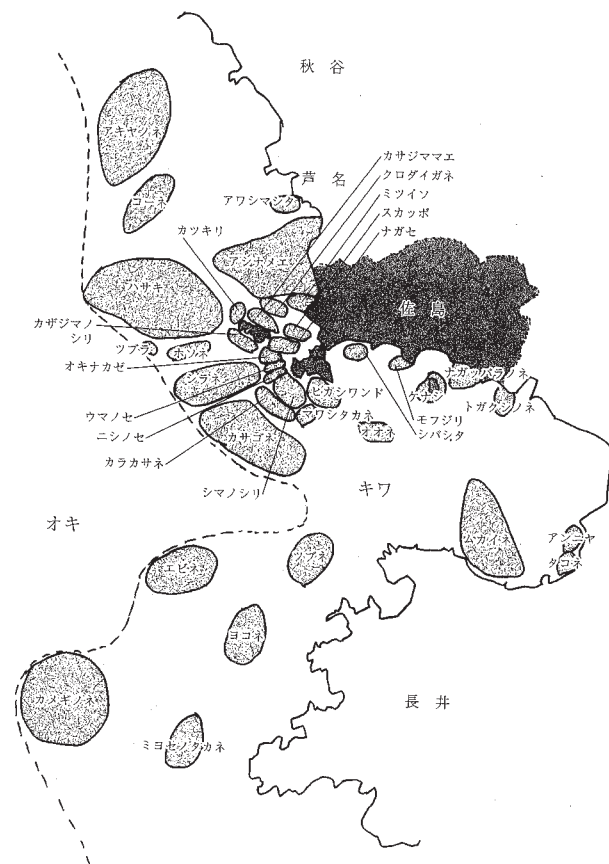


図3 イソネの名称

反の耕地しか持たない“貧しい農民”像である。

また、明治4年(1871)の戸籍簿によると、総戸数176戸のうち151戸が漁業に従事するが、そのうち135戸が農業も営む「農間漁業」とされている(神奈川県教育庁指導部文化財保護課, 1971)。じつに漁家割合は85パーセントに達する。そうした状況は、本稿の設定した時間軸である昭和25-30年という高度経済成長期前までほとんど変わって<sup>(7)</sup>いなかった。

海付きの村に暮らす百姓漁師の場合、漁は男性の仕事とされるのに対して、農の多くは女性と老人により担われている。また百姓漁師の農は基本的に自家消費を旨としたものであるため、家に必要な作物が多品種・少量栽培される。佐島の場合、ヤトでは稲作、ヤマでは畑作がおこなわれていた。

以上のような生業のあり方を、佐島の人びとは百姓漁師と称する。したがって、本稿で主な検討の対象となるアマ(佐島ではモグリ)は百姓漁師である(安室, 2011a・b)。

#### (4) 漁場としてのイソネ

イソは磯、ネは根のことであるが、それが総称され、海藻が生える岩礁地帯をイソネと呼ぶ。イソは干潮のときに水上に出てしまう岩場をいうのに対して、ネは干満に関係せず水中にある岩場のことだとされる。岩礁地帯のうち、浅いところをイソ、深いところをネといっているわけで、実際には連続していることが多く、その意味でもイソネと一括されて呼ばれる。

佐島のような岩礁地帯では、イソネ(磯根)が、生計維持のうえで重要な意味を持つ。ネおよびイソネといった場合、漁師にとってそれはゲバ(漁場)と同義であることをみても理解される。

そうした佐島において、もっとも多くの人々が日常的に携わる漁は磯漁である。詳しくは後述するが、代表的な磯漁には、ショウバイ(商売:現金収入)としておこなう漁に、秋から春にかけてのミヅキと夏のモグリがある。それを組み合わせることで年間の基本的なショウバイとする。そうしたミヅキとモグリの組み合わせを基本としつつ、その合間またはそれに並行して一本釣りや刺し網などい

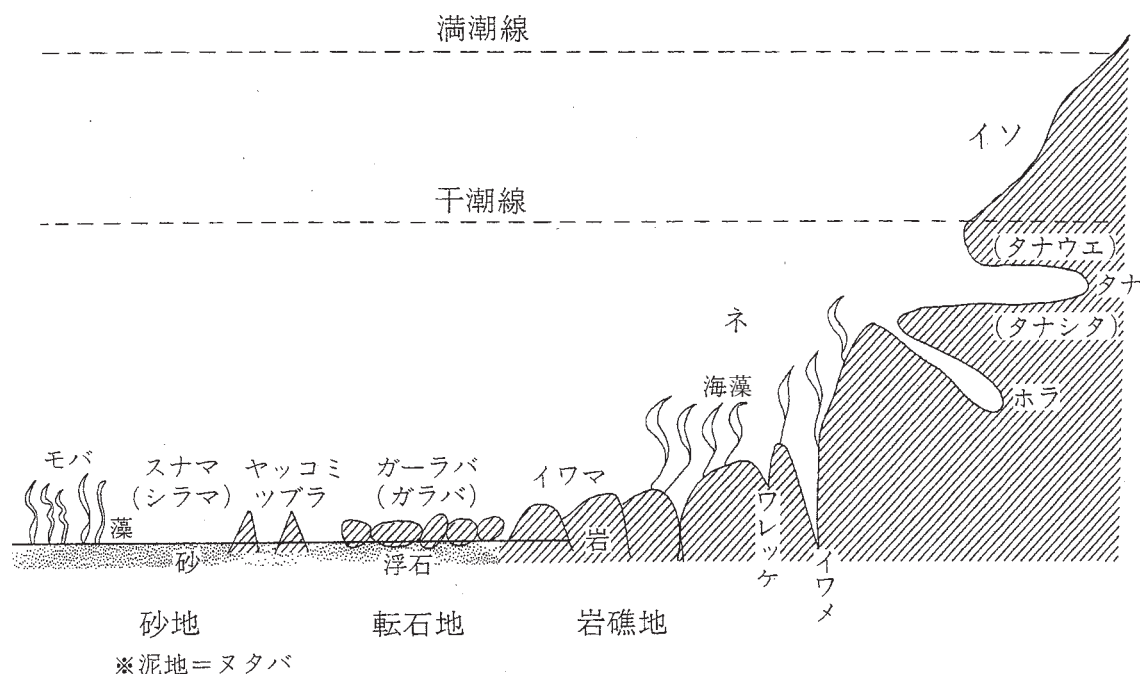


図4 海底の微地形



くつかの漁が補助的に組み合わせられる。そうしたショウバイとしての漁は男がおこなうものとされるのに対して、自給的なオカズトリとしてのイソドリが年間を通じて女性によりおこなわれる。イソドリは統計上に現れることはないが、家の生計を維持するうえで特に重要な意味を持つ。このように、ショウバイとしてのミヅキとモグリ、それにオカズトリとしてのイソドリを組み合わせることが佐島のような岩礁性の海付きの村における基本的な漁撈パターンであるといっていよい。

ミヅキとモグリが男性により担われるショウバイ（商売）のための漁であり、それが漁獲対象としての商品価値の高いアワビに象徴されるなら、イソドリは女性による家の毎日の食料を得るためのオカズトリ（自家消費）の漁であり、それはタマ（岩礁性の巻き貝の総称）に象徴される。佐島では貝は巻き貝のことを指し、大きくケーとタマに2分されるが、ケーつまり貝はアワビを指し、それ以外の貝はタマと称される。つまり、佐島の人にとって貝はアワビだけなのである。

### 3. アマの実像——アマとは何か——

#### (1) モグリ漁の実際

##### ①モグリ漁師

佐島では裸潜水漁のことをモグリといい、男性が従事する。1970年代にウェットスーツがでるまでは、身に着けるのはスコシと呼ぶごく小さな褌のみで、まさに裸に近い姿で潜水していた。<sup>(8)</sup>

詳しくは後述するが、潜る深度に応じて、オキモグリ、キワモグリ、イソモグリ（オカモグリともいう）に3分類される。大まかな基準としては、イソモグリは、背の立つところ、つまり水深が1尋<sup>ひろ</sup>（1.5-2m）より浅いイソ（磯）が主たる漁場となり、キワモグリは5尋（7-8m）くらいまでのところが漁場となる。オキモグリではその人の潜水能力や生業戦略にもよるが10尋（15m）から15尋（23m）くらいまでのネ（根）が漁場となる。このうち佐島においてもっとも一般的なモグリはキワモグリである。

1950年代、オキモグリは多いときでも15人くらいしかいなかった。それに対してキワモグリはさまざまな漁と兼業する人を含めると50人はいた。キワモグリ50人のうち、イソモグリは10から20人くらいであった。イソモグリの数に幅があるのは、キワモグリかイソモグリかの違いは自己認識による部分が大きく、客観的に見て明確な区分の基準といったものがなかったからである。

現在はモグリの仲間（任意の漁業者集団）はひとつだが、1950年代には、オキモグリとキワモグリとは別の仲間ができていた。そのとき、イソモグリには独自の仲間はなく、キワモグリに含まれていた。その意味で、イソモグリは独立した類型というよりは、キワモグリの中に含まれるものであるといっていよい。事実、普段はキワモグリでも、風が強くて舟が出せないときにはイソモグリをする人は多い。

1992年現在、佐島ではモグリの漁期は7月から9月までの3ヶ月間である。その間、モグリに出るのは40-50日である。1950年代は、6月1日から10月10日までの<sup>よつきとうか</sup>四月十日（4ヶ月と10日間）がモグリの漁期であった。しかし、実際には9月半ばにもなると寒くてモグリの能率は落ちてしまうため、エビ網やミヅキといった他の漁に移る人は多い。

## ②モグリの種類

### [キワモグリ]

キワモグリは、キワを主な漁場とするモグリである。通常、岸から漁場となるキワのネまで舟で行く。ひとりで行く場合と、一艘の舟（三丁櫓の大船）に4,5人が乗り込んで漁場に行く場合とがある。比較的経験の浅い（若い）うちは集団で舟に乗り合って行く場合が多い。その後、経験を積み自分の舟を持てるようになると、ひとりで行くようになる。

その日狙うネに着くと碇を打って舟を固定し、旗を立てて潜る。それがモグリをやっていることの印となる。この旗が立っている半径50メートルは危険防止のため他の船舶が通ること、および網を掛けることは禁じられている。そして舟を中心に、アワビが多いとされるネのハタフチ（砂地との境）をおもに潜ってまわる。複数で行った場合には、お互い邪魔にならないよう舟を中心に放射状に広がって漁をする。

モグリの時にはメガネ（二眼の水中眼鏡）をする。浮子として使うタル（樽：浮き）には、スカリ（網でできた獲物入れ）をつり下げ、ケーオコシ（アワビの搔爬具）も長い紐で繋いでおく（写真1）。こうしてタルを使うキワモグリのことをタルモグリともいう。人によっては、モリやヒシ（ともに刺突具）も持っていく。トコブシはイソガネで採り、アワビは身に傷を付けないようにケーオコシで剥がしてから採った。ヤスは魚、ヒシはタコを突く。

キワモグリでは、午前8時に漁に出て午後3時頃まで海にいるが、その間に1人当たり100-150回の潜水を繰り返す。その間に、1-2時間に一度の割合で舟に上がって30分ほどヒドコ（火床）の火に当たって暖を採る<sup>(9)</sup>。どれくらいの間隔で舟に上がるかは人により、また海中の状況により異なる。

### [オキモグリ]

オキモグリはキワの先にあるオキにまで漁場を拡大したモグリである。そのためオキモグリも舟を



写真1 モグリ漁具（ケーオコシ）



写真2 モグリ漁

用いる。基本的に漁はひとりでおこなうが、トモロシという助手を連れて行くこともある。トモロシの役目としては、潜水中に舟を操ったり、火を起こしたり、またフンドン（重り、4-5キロ程度）を引き上げたりする。男の子どもがいればそれをトモロシにするが、女子の場合はたとえ子どもであっても舟には乗せない（トモロシにはしない）。風が吹いて舟を一定の場所に停泊させておくことが難しいときにはトモロシが必要である。漁場とするネに着くと、ひとりの場合には、碇を降ろしてしっかりと舟を固定し、キワモグリと同様に、旗を立てておく。そうしてから舟のごく近くでモグリをおこなう。キワモグリののようにタルを使って舟から離れて漁をおこなうことはない。

ケーオコシに紐を付けて首に掛けておき、ヒシやモリは手に持ち、メガネ（オキモグリ用のものは水圧調整のためのフウセンが着いている）をして潜る。持ち物はキワモグリに比べると少なく、最小限に留める。潜るときには、フンドンを利用する。そのため、オキモグリをフンドンモグリともいう。フンドンにつかまり頭を下にして一気に海底へ降りる。獲物があるときは手に持って浮上するが、持ちきれない分はスコシ（禪）の紐のところに挟んでくる。水面に上がると獲物を舟に上げ、櫓元に結び付けてある紐をたぐってフンドンを引き上げ、またそれにつかまって海底へ潜る。そのように5-10回、潜水を繰り返す。そうすると真夏でも身体が冷え切ってしまうため、いったん舟の上に乗って暖を取る。舟上では体を拭き、ポッタと呼ぶ仕事着を背に掛けてヒドコの火に当たる。舟にはトバ（覆い）を掛けてヒドコの火が消えないようにしておく。

海中にいる時間は30-50分程度で、その後30-60分は舟上で火に当たるということを繰り返す。その単位をクラという。つまり舟から海中に下り、また舟に上がるまでがクラである。なお、1クラあたりに潜る回数や時間は人それぞれである。通常1日に、昼飯までに2クラ、その後に2、3クラの計4、5クラおこなう（つまり1日に計30-50回潜ることになる）。午前8時過ぎから潜り、午後3時には漁を終える。

#### [イソモグリ]

イソモグリは水陸漸移帯のイソを漁場とする。そのため、通常イソモグリは舟を使わない（写真2）。陸（オカ）を歩いて漁場となるイソに入っていくので、オカモグリともいう。基本的にひとりでおこなう。ショイビク（背負い籠）に漁具などの道具を入れてゆく。ショイビクが舟の代わりということになる。漁場は主に天神島や笠島の周囲のイソである。水深2メートル以浅の背の立つところを中心となる。メガネ（水中眼鏡）をして、イソガネ（トコブシトリ）を手にトコブシやアワビを採る。採ったものはイソの潮だまりのところにスカリに入れて置いておく。風が強くて舟を使うことができないようなときに、おこなわれることが多い。

### ③モグリの漁獲物と漁業戦略

モグリの獲物としてはアワビが第一に挙げられる。過去から現在に到るまでもっとも商品価値が高い。佐島においてケー（貝）といえばアワビのことを指すのはそうした背景があつてのことである（2008, 安室）。アワビの中でもとくにクロアワビの漁獲は大きく、モグリで漁獲されるアワビのうち8割がクロアワビで、シロアワビ（マダカアワビ+メカイアワビ）は2割程度である。

また、中にはサザエやウニまたトコブシを専門とするモグリもいた。この場合、生涯にわたってサザエ、ウニ、トコブシを専門とするのではなく、季節的または年ごとさらには経験により専門とする

時期がある。たとえば、タナやホラの中にいるアワビよりも外に出ているサザエの方が採りやすいため、モグリの経験が浅い人はサザエ採りから始める。また、浅いところほどアワビの漁獲は減り、代わってトコブシが多くなるため、イソモグリでは主たる漁獲物はトコブシになる。

このほか、専門でとまではいえないが、モグリでは根魚やタコ、イセエビなども採ることができる。なお、サザエやウニが市場において高値で取引されるようになるのは1970年代以降のことであるし、トコブシもアワビに比べると単価が安いいため、大量に採らなくては商売にならなかった。そのため、サザエやウニ専門のモグリといってもそれは比較的最近のことに過ぎない。

たしかに佐島のモグリが第一の獲物とするのはアワビであるが、実際のところアワビ専門というのはむしろ外向きの顔つまり自意識であるといったほうがいい。むしろ、臨機応変に漁獲対象を、市場価格や資源量また漁師自身の嗜好や技量といったものを勘案して、年ごと・季節ごと・熟練度ごとに変えていたといったほうが正しい。

また、漁師の嗜好やプライドに関わって漁獲物が選ばれる例としてオキモグリが挙げられる。オキモグリの最大の魅力は特大のアワビが採れることである。岩の上に出ているアワビ（マダカアワビに多い）、いわゆるノテンゲ（野天貝）は、1個が3キロにもなるものがあつた。そうした特大のアワビは商品価値はさほど高くなく、漁獲量も少ない。そのため、身体への負担が大きく体力の消耗が激しいオキモグリをするよりも、むしろキワモグリで中型のクロアワビを数多く採った方が商売としてはよい。しかし、特大のノテンゲを採ることは漁師にとっては博打にも似て面白いとされ、他の漁師との違いを誇示できるものであつた。そのように考えてくると、モグリとは単なる生計維持のための手段とはいえず、効率よく現金収入を得るためだけの生業技術でもない。

#### ④生計活動としてのモグリ

佐島では金銭収入をもたらす生業をショウバイ（商売）という。壮年の男性がショウバイのためにおこなう漁がモグリである。佐島では昔から「モグリができれば美味しい飯が食える」といった。一本釣りやアグリ網（イワシ巻き網）の漁師に比べると金銭収入が良く安定した暮らしができるからだと言われる。

反面、佐島にはさまざまな漁があるが、その中でモグリはもっとも辛く厳しい漁だとされる。1分間潜っていられなければ一人前とされないが、それは単に潜るだけでなく海中において採集活動をしなくてはならないためである。キワモグリの場合は45秒程度でも仕事になるが、オキモグリは最低でも1分は保たないと仕事にならない。

その結果、モグリに行くと1日で体重が2-4キロも減るという。それが3ヶ月間続くことになる。そのためモグリの漁師はシーズン前に体重を増し、体力をつけておかなくてはならない。また、モグリ漁が始まると、漁師は体力温存のためモグリのこと以外は、他の漁はおろか、いっさい家のことはしないという。

また、モグリの場合、寒さと水圧への対応が重要となる。潜水に伴う水圧のため鼓膜や肺に支障をきたす人は多く、夏でも潮が速いと水は冷たく身体には大きな負担となる。そのため、裸潜りの時代はモグリは40-45歳が限度であつたといわれる。それを越すと、とくにオキモグリの場合は、体力が落ち息が続かなくなる。つまり、モグリは15歳から始めても最大で30年しかおこなうことができない



いわけで、一生を通じると他の漁との組み合わせなくしては佐島での生活は成り立たなかったことを意味する。

また、モグリの仕方も年齢によって変化する。海底のタナやホラは手が入る程度の小規模なものばかりではなく、身体全体が入ってしまうような大タナや大ホラもあり、そこには暗いところを好むクロアビやメカイアビが多くいる可能性がある。そのため、大タナや大ホラばかりを狙うモグリがいた。しかし、それは大きな危険を伴い、しかも息が長い人しかできない。そのため、体力があり怖いもの知らずの若いうちしかできなるとされ、その期間はせいぜい5年間ほどにすぎない。そのように、面白いが過酷なオキモグリを止め、年齢がかさむとともにキワモグリやイソモグリに転換する人は多い。

## (2) モグリとは何か

〈一般的な認識〉

〈モグリの自己認識〉

### ①モグリの類型——2系統5種

佐島では、モグリの種類について、これまで説明に用いてきたオキモグリ・キワモグリ・イソモグリ<sup>(10)</sup>（オカモグリ）のほかにも、タルモグリ・フンドンモグリという分類が

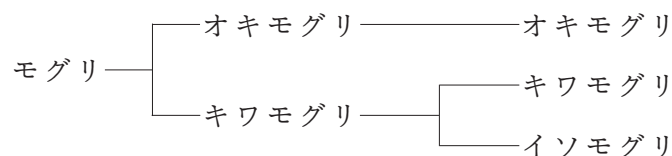


図5 モグリの認識——一般的認識と自己認識の違い——

ある。大きくは、オキモグリ・キワモグリ・イソモグリとタルモグリ・フンドンモグリという2系統に分けられる。前3者と後2者はそれぞれ内部において類型化されるとともに、前3者と後2者とは緩やかな対応関係を持って理解されている。つまり、キワモグリ・イソモグリはタルモグリと、またオキモグリはフンドンモグリとそれぞれ同類と見なされる。

オキモグリ・キワモグリ・イソモグリという分類は、オキ（沖）・キワ（際）・イソ（磯）というそれぞれのモグリが使う漁場に由来している。それに対して、フンドンモグリとタルモグリは分銅と樽という特徴的（必須）な道具により類別化されている。

2つの系統間の関係は、前述のように、キワモグリ・イソモグリ≡タルモグリ、オキモグリ≡フンドンモグリとされるが、それはあくまでも緩やかな対応に過ぎない。現実にはオキモグリだからといっても、その人がすべてフンドンモグリとも限らない。また、オキモグリでありながらタルを使う人もいる。さらには、イソモグリの場合も、通常用いるタルではなく、代わりにオケを用いていることはよくある。

また、同じ系統内のオキモグリ—キワモグリ—イソモグリの関係を見ても、実際のモグリ活動の中では、そうした分類を適用できない場面が多々ある。たとえば、オキモグリに分類される人でも、必ずしも10尋（15-20m）を超えるような水深の漁場だけで漁をおこなっているわけではなく、風や潮の状況に応じて水深3-4尋（5-8m）のいわゆるキワのネや1尋（1.5-2m）以下のイソを漁場として使うことがある。

つまり、モグリに関して佐島には2系統、計5種の類型が存在しているが、じつはそれを超える多様なモグリの実態がある。もし、単純にキワモグリ・イソモグリがタルモグリと、オキモグリがフンドンモグリとそれぞれ一致するなら、2系統に分けて認識する必要はない。モグリに従事する人の嗜

好、能力、経験といったことを反映し、かつ漁をおこなう当日の自然条件を加味しながら、モグリは漁場や道具が選択され組み合わせられており、結果として人それぞれに個性あるモグリ漁がおこなわれてきたといえよう。

さらに、上記の類型には、舟を用いるかどうか、トモロシ（舟に同乗する手伝い）を使うかどうかといった要素を加えると、そのパターンはさらに増えることになる。たとえば、オキモグリの場合、比較的浅いところではトモロシを使わず、つまりひとりで舟をこぎ、またタルを用いてモグリ漁をおこなうことがある。それに対して、同じように舟を用いるキワモグリであっても、深場ではタルではなくトモロシの手伝いを得てモグリをおこなう場合がある。

実際、他の地域では舟やトモロシを指標として類別化がなされるところもある。<sup>(11)</sup> それに対して、佐島の場合には、モグリに舟やトモロシは使用されてはいるが、それをもって類別化されることはない。前述のごとく、漁場と道具により類型化されるということは、佐島ではその2つの要素がモグリを象徴するものとして強く認識されていることを示している。

## ②モグリの自己認識と他者表象

前述のように、モグリには、オキモグリ・キワモグリ・イソモグリの3類型が存在する。しかし、その認識は住民の中でも人により異なっている。モグリを生業としない人を含む住民一般の認識では、モグリはキワモグリとオキモグリの2類型しかない。漁業協同組合における仲間（任意の漁業者集団）もキワモグリの仲間とオキモグリの仲間というように2つに組織される。

一方、モグリを生業とする人の自己認識では、オキモグリとキワモグリという類型を基本としつつも、さらにキワモグリのなかに、磯まわりの浅場を専門とするイソモグリが類別化される。つまり、モグリをめぐってはその認識のあり方として、図5のような樹形図が描かれる。漁場に注目すると、ネにおいてモグリをおこなうのがオキモグリとキワモグリであるのに対して、イソでおこなうのがイソモグリということになる。

また、自意識の問題として、ネを主な漁場とするキワモグリのなかには、とくに浅いイソまわりでモグリ漁をおこなう人をイソモグリと呼んで自分と区別しようとする傾向がある。それに対して、イソまわりでモグリ漁をおこなう人は自分たちをイソモグリとはいわず、あくまでキワモグリと称する。つまり、モグリを生業とする人の自己認識の中にもイソモグリの意味するところが2つあることになる。それは、モグリを生業とする人びとの間で、モグリの類型をオキモグリとキワモグリとに2区分する人と、オキモグリ・キワモグリ・イソモグリに3区分する人がいることを示している。

また、そうした状況は、ウェットスーツが登場して以降、さらに複雑化している。ウェットスーツを着ることで、キワモグリの人でも裸潜り時代には潜ることのできなかった深度（オキモグリの領域）まで潜って漁をおこなうようになったからである。そうになると、実際のところオキモグリとキワモグリという区別は必要なくなってしまう。

通常、イソモグリは、背の立つところ、つまり水深が1尋（1.5-2 m）より浅いイソが主たる漁場となる。それに対して、キワモグリは5尋（7-9 m）くらいまで、オキモグリではその人の潜水能力や生業戦略にもよるが10尋（15-20 m）から15尋（23-30 m）くらいまでのネが漁場となる。ただし、前述の通り、オキモグリといっても、実際にはオキばかりではなくキワでも漁をすることは多

い。その意味で言えば、オキモグリはキワモグリより、キワモグリはイソモグリよりも、水深による漁場選択の幅が広いことになる。

つまり上記の3類型で水域を分け合っているというよりは、実際にはイソのような浅いところは各類型のモグリが利用している。そう考えると、表1に示すように、漁場選択の幅が最も広いのがオキモグリで、その中でオキのネを利用しないのがキワモグリ、さらにオキはもちろんのことキワでもネは利用しないのがイソモグリというように規定することができよう。

厳密に言えば、オキモグリとキワモグリ・イソモグリを漁業者の類型に適用することはあくまで自己認識の問題に留めておくべきである。身体的・技術的にオキモグリのできない人は存在するが、オキモグリのできる人はキワモグリやイソモグリもおこなうからである。オキモグリという類型に属する人は漁場の選択の幅が広がるだけのことである。しかもたいてい若く元気なときはオキモグリをするという。

つまり、人の一生を単位としてみた場合は、若い元気なときにはより大きな貝を求めてオキモグリをおこなう傾向にあるが、体力が落ちてきたり、病気をしたりしてあまり深くまで潜れなくなると、キワモグリやイソモグリに移行することは多い。むしろ上記の3類型は人の一生に合わせたサイクルであるといった方がよい。

また、風や潮といった自然条件によっては、1日のうちに、漁場を変えながら漁をおこなうこともよくあることである。たとえば、はじめのうちはキワのネに出てキワモグリをしていても、風が強くなるにしたがい、それを避けて島陰のイソに移動しイソモグリをおこなうようにする。この場合は、ひとりの人の1日の漁撈活動の中にキワモグリとイソモグリという2つの類型が存在することになる。

つまり、オキモグリ・キワモグリ・イソモグリおよびタルモグリ・フンドンモグリはモグリ漁に従事する人の類型ではなく、住民の自己認識を反映した漁業戦略の類型であるとするべきである。従来の研究は、オキモグリ・キワモグリ・イソモグリといった類型がまるで従事者が異なるかのように扱われてきたが、本稿では明確に漁業戦略の違いと位置づけ、しかもそうした漁業戦略は同一人物であっても年齢や経験、自然条件、また市場の動向などによって変化しうるものであるということを確認しておく。

#### 4. 磯漁の諸相 ― アマ漁との関連性 ―

##### (1) ミヅキ（見突き）

###### ①ミヅキ漁師

ミヅキは佐島を代表する磯漁の一種である。舟上からハコメガネを用いて海中を覗き、長い柄の付いた搔爬具や刺突具を用いて魚介類を捕ったり、また切除具を用いてカジメやテングサなどの海藻類

表1 モグリの漁場選択

モグリ類型 海域・海底		モ グ リ		
		オキモグリ	キワモグリ	イソモグリ
オキ (沖)		×	×	×
	ネ (根) 12ヒロ～	○	×	×
キワ (際)	ネ (根) ～12ヒロ	△	○	×
	イソ (磯) ～1ヒロ	△	△	○



写真3 ミヅキ漁

を採集したりする。なお、ハコメガネが普及する以前（明治時代前半頃まで）は、竹筒に油を入れていき、そこに棒を差して先に付いた油を水面に垂らしては、その油が海面に広がる一瞬を利用して水底を見通しては獲物を捕っていたとされる。

また、夜間におこなうミヅキの一種にヨヅキ（夜突き）がある。夜、松の根を燃やして灯りとし、その明かりに目が眩んで動きの鈍くなった魚を銚で突きとる漁である。水深3メートル以内の

浅いところでおこなうが、昼間にはいない大型の魚を捕ることができる。

ミヅキは基本的にひとりでおこなう漁である。片手で各種の竿（採取具）を操り、顔でハコメガネを海面に押さえ、もう片方の手で櫂を漕ぐ（写真3）。しかし、ゾー（アワビトリ）で起こしたアワビを竿先に付けたタマで掬ったり、またエビスキ（エビスクイ）のように、竿先に付けたタコで脅しながら、タマでエビを掬ったりするときには、両手が竿の操作でふさがってしまうため、足で櫂を操ることになる。まさに全身を使っの漁である。

ミヅキの場合、波や潮の流れのある海上で一定のところに舟を留めておかななくてはならないため、どうしても細かな櫂の操作が必要となる。そのため、かつては2人で舟に乗ることもあった。その場合、ひとりがトモロシといって櫂を操る役となり、もうひとりが竿を繰り実際の漁をおこなった。

ミヅキ漁をおこなうのは男性である。現在、佐島ではミヅキ漁に重きを置く人は4,5人になってしまったが、かつてはモグリに匹敵する人数が従事していた。

そうした状況が変化するのは、モグリにウエットスーツが登場（1970年頃）して以降である。これにより、夏のモグリと秋から春にかけてのミヅキという生計維持の基本的な組み合わせが成り立たなくなったとされる。ウエットスーツの着用により長時間の潜水が可能となったため、アワビが夏場のモグリでおおかた捕られてしまうようになったためである。そのため、ミヅキは生計上の重要性が低くなり、結果としてミヅキ漁師の数が減少していった。また、ミヅキを続ける人もアワビ専門では成り立たなくなり、サザエやイセエビに漁の重心を移した人が多い。

## ②ミヅキの漁撈暦

ミヅキは一年中おこなうことはできるが、主には11月から2月頃までがシーズンである。11月頃、北風が強くなり、海水が澄んでくるとともに、カジメなどの海藻が枯れてネの中が空いてくる。そうするとミヅキに適した環境条件となる。舟上からハコメガネで覗いたときの見通しが良くなるからである。さらに12月から1月にかけて、いったん枯れたカジメからでる新芽を食べにホラやタナの奥からアワビが出てくるため、ミヅキでも採りやすくなる。とくに普段は暗いところを好みホラの奥にいるクロアワビはミヅキではこの時期しか採ることができない。

カジメの新芽が出る季節は浜から見ても海が真っ赤に見えるという。1月末になるとカジメは葉を広げだすためまた徐々に海中の見通しは悪くなっていく。そうして2月末まではアワビを主としたミヅキが可能となる。その後も、漁獲の対象を変えれば、夏でもミヅキはでき、実際に年間を通してお



こなう人もかつては存在した。しかし、アワビ捕りについては夏にはモグリの方がはるかに効率が良くなるし、また網漁を中心に他の漁もおこなわれるようになるので、ミヅキは一般的ではなくなる（身体の具合でモグリができない人やミヅキが得意な人がわずかにおこなう程度）。

### ③漁獲物と漁業戦略

ミヅキの漁獲物は、アワビやサザエを中心に、イセエビ、タコ、ウニ、テングサなど多様である。このほか、ヨヅキでは、コショウ（コショウダイ）やクロダイ、ヒラメなど大型の魚を捕ることができる。このように多種の魚介類を採捕することができるのがミヅキ漁の大きな特長である。

そのため、おなじミヅキといっても、アワビを専門とする人、イセエビを専門にしつつアワビも捕る人、またアワビとサザエを組み合わせる人など、その組み合わせは漁師自身の嗜好や技量、また季節および時代による市場の需要といったことによりさまざまである。漁師はそのときどきにおいて、値の良い（商売となる）ものを、自身の経験・技量・嗜好にあわせて捕るというのがミヅキの基本となる。また、そうした中で、自分が専門（得意）とする漁獲対象が決まってくる。

時代的・時期的に漁獲量が大きく変動するものにテングサがある。時期的には、5月5日がテングサの口開け（解禁日）で、もっとも漁獲量が上がるときである。解禁後も寒くなるまではテングサを採ることができる。しかし、解禁日には20-30貫目（74-111 kg）も採ることができるが、次の日は10貫目（37 kg）以下となり、さらにその後は通常3貫目（11 kg）ほどに漁獲量が落ちてしまう。そうするとモグリやエビアミ（イソタテアミ）の方が稼ぎが良くなるので、ミヅキでのテングサカキはおこなわなくなる。また、テングサが市場において高値を付けた時代はテングサ専門のミヅキも存在したが、そうした時代が過ぎ価格が暴落するとミヅキではテングサトリは商売にならなくなった。

そうした多様な漁獲物のなかにあって、アワビの位置は特殊である。近代以降、商売としておこなうミヅキでは主要な漁獲対象はアワビとなる。それはその商品価値の高さに起因する。しかも、そうした商品価値はテングサのように大きく変動することがない。この点は、アワビが第一の漁獲対象とされる背景として、ミヅキに限らず、モグリにも共通する。

そのため、実際には、まずはアワビをねらいつつ、自然条件や技量によりそれがかなわないときには他のものを採捕するという戦略をとることになる。そして、さらにそうした基本に、時期を限定してテングサやイセエビなど多様な漁獲対象を組み合わせしていく。

### ④漁具および関連用具

ミヅキ漁に用いる漁具としては、ゾー（アワビトリ）2,3種、サザエツキ3,4種、オオグシ、プシ（ヒシ）2,3種、フンドンビシ、タマ（玉網）がある（写真4）。すべてに長い柄が付けられている。例えばゾーにはオオゾーとコゾーがあるが、そのように同じものでも数種類を用意するのは、さまざまな海底の状況や獲物のサイズに対応するためである。それらを1セットとして船縁に置き、必要に応じて手に取り用いる。また時期は限定されるが



写真4 ミヅキ漁具

テングサを採るためのテングサカキやワカメなどの海藻を刈るためのカマを持ってゆくこともある。このほか、ヨヅキにはモリを用いる。こうした道具はすべて村の鍛冶屋で誂えて作ってもらう。

また、柄の部分は、カシ（アカガシ）の棒が使われる。柄は水深に応じて長さを調整できるようにするため2,3ヶ所に継ぎ手が付けられている。後に柄にグラス・ファイバーが使われるようになるとそうした継ぎ手は必要なくなった。

ミヅキの場合、アワビはゾーで採る。身を刺したり、貝殻を壊したりすると商品価値が下がるため、そうならないようにうまく貝殻の端の固い部分にゾーの先をかけて起こしてから採る。ノテンバ（野天場）にいるアワビ（ノテンゲ）は舟上からは岩と一体化してみえ見つけづらい。貝殻の縁にごく細く出ている青白いへりを目印にして見つけ出すのは経験と勘を要するとされる。

昭和初期（1930年のころ）までは、アワビはゾーではなく、ヒシで突き採っていた。アワビを起こしてからヒシでアワビのカイベリの部分（ここは突いても死なない）を突いて採った。現在は、少しでも身に傷を付けると商品価値がなくなるためヒシを使うことはない。

ミヅキでイセエビを採る方法としては、エビスキ（エビスクイ）がある。竿の先に付けたタコをいかにも生きていのかのように操っては、それで脅してエビをホラやタナから追い出して、タマアミで掬う。足で櫓を操って舟を一定に保ち、かつ片手でタコを操り、もう片方の手でエビを掬うもので、ミヅキの中でもとくに特殊な技術だとされる。そのため、誰でもできるわけではなく、商売として専門におこなっていたのは2人だけである。

このほか、サザエは、尖端が3本ないし4本に分かれたサザエツキで採る。アンコウやヒラメは海底がシラマ（砂地）になっているところで、フンドンビシ（縄を付けた分銅状の突き具）を用いて捕った。

ミヅキに使う専用の舟をボウチョウまたはペカブネという。そのためミヅキ漁を佐島ではボウチョウともいう。ボウチョウは浅いイソネ（磯根）に入るため、シキ（底板）が平らで、小回りがきく小舟になっている。ひとりで操船しつつミヅキ漁もおこなうために特別に短く削った櫓を用いる。なお、ボウチョウを用いる人はミヅキに特化した生計を営む人が多いのに対して、モグリもおこなう人は通常用いるサンマイハギという舟でミヅキをおこなっている。

## （2）イソドリ（磯採り）

### ①イソドリする人

イソドリ（磯採り）はオカドリ（陸採り）ともいい、磯物採集のことである。おもにイソおよびイソに近いネにおいて、背の立つ深さまでの範囲でおこなわれる。水中を見るためにハコメガネ（ミヅキで使用するものより小型のもの）を用いることが多いが、モグリ漁師の用いる水中メガネを使うことは慣行として禁じられている。それを用いれば、イソモグリとみなされる。

しかし、実際にはイソモグリとイソドリの境界は曖昧である。用いられる漁具はほとんど変わらない。前述の補助用具としてのメガネが異なるだけである。とくにウェットスーツが登場して以降はイソドリといいながら、背の立つ水深の範囲を超えて潜水による採取がおこなわれたりしている。

イソドリを商売（金銭収入）としておこなう人はいない。そのためイソドリ漁師という言い方はしない。当然、漁獲物を市場に出すことはない。オカズトリが主の漁であり、昔も今も楽しみでやって

いる人が多い。そのため、イソドリは女性（漁師の妻）や年寄り（隠居漁師、とくに会社経営されるアグリ網やキンチャク網の漁船員を引退した人またミヅキやモグリの技術がない人）がおこなうもので、壮年の漁師はおこなわない。イソにおける漁撈活動のうち、女性や年寄りがおこなうのがイソドリであり、青壮年の男性がおこなうのがイソモグリということになる。

ここで重要な点は、漁業権に関してである。モグりにしろ、ミヅキにしろ、それをおこなおうとする人にとって漁業権の取得（漁業協同組合に属すること）は必須の条件である。それは1950年代も現在も変わらない。しかし、イソドリをおこなう人は漁業権を問われることはない。厳密に言えば、漁業権を必要とするが、一家の主人が漁業権を受けていれば、その妻や隠居老人といった家族がイソドリをすることは何ら問題ないとされる。そうしたことを考えれば、イソドリは「商売にはならない」という側面とともに「商売にしてはならない」といった側面もあるといえよう。

## ②イソドリの漁撈暦

ほぼ1年中おこなわれるが、イソドリにもっとも適するのは2-3月の水の澄んだ大潮の時である。反対に、8月は潮が悪いためイソドリには適さない。また、イソドリは昼間だけでなく夜もおこなう。それをヨシオという。冬の大潮の晩、カンテラを灯してヨシオをした。この点は、ミヅキにおけるヨヅキと共通する。

また、ほぼ1年中おこなわれるイソドリにあって、所々に海藻採取のクチアケ（口開け：解禁日）が村（漁協）の取り決めとして設定されている。クチアケが設定される海藻は、ワカメ（2-3月）、ヒジキ（3月、ワカメとは別の日）、テングサ（5月）、カジメ（9月）がある。それぞれ具体的な日時は海況や海藻の成長をみて決められる。

通常イソドリは女性や年寄りが単独でおこなうものであるが、クチアケの日およびその後の数日間だけは家族全員で海藻採取に当たることが多い（写真5）。そのため、クチアケの日は佐島中の漁師とその家族がイソに出てきた。その意味で言えば、年中おこなわれているイソドリのなかにあって、海藻採取のクチアケは年中行事にも等しい生活の折り目としての意味をもっている。

## ③漁獲物と漁業戦略

漁獲物は多種多様である。イソにいる魚介類は食べられるものならほとんどが対象となる。その意味で獲物が1種ないし2,3種に特化する他の漁法とは一線を画している。具体的には、トコブシ、タマ（タマ、カジメッタマ）、タコ（マダコ、サムケダコ）、ナマコ、ウニ（アカッカゼ、クロッカゼ、バフン）、サザエ、アワビ（クロッケ、マタゲー、マッルケ）、カレイといった魚介類とワカメ、ヒジキ、カジメ、アカモクなどの海藻類が佐島では採捕されている。なかでもトコブシはイソドリで採ることが多く、主要な漁獲対象となっている。

これらイソドリで採捕される魚介類はすべて自家消費を目的とする。その意味で、多種のものが少量ずつ（その日に家で食べる分程度）でも安定して採捕されることに意味（イソドリの漁業戦略）があるといえる。

そうした中にあって、イソにおける海藻採取は重要な生業となる。漁撈形態としては一種のイソドリであるが、経済的な意味ではイソドリとは違って商売となるため、佐島では通常のイソドリとは区

別する意識が強い。それぞれ採取する海藻により、ワカメキリ、ヒジキトリ、テングサカキと呼ばれ、いずれも村（漁協）によりクチアケが設定されている。

とくにテングサは短期間ではあるが、大きな収入をもたらした時期（1920年代）があり、当時は専門にテングサを採る人がいたほどである。技術的にはミヅキとの差はほとんど無く、まさに舟を用いるかどうかはミヅキかイソドリかの違いとなっている。ただし、カジメキリやヒジキトリには運搬の便を考え、ボウチョウやベカブネといった小舟を用いることは多いため、いっそうミヅキとイソドリとの境界は不分明となる。

#### ④漁具および関連用具

通常、イソドリには舟は用いず、イソを歩きながら魚介類の採捕をおこなう。イソドリに持参する



写真5 ヒジキトリ——クチアケ——



写真6 イソドリ



写真7 テングサカキ

道具は何を採捕するかによって異なる。そのなかでイソガネ（トコブシトリ）とハコメガネは多くの人に共通したイソドリの持ち物となる。前述のように、慣行としてモグリと同じ水中メガネは着けてはならないため、海中に潜る場合には素目ということになる。

トコブシやタマを採るためのイソガネ（トコブシトリ）はモグリの使うケーオコシとはかたちが異なる。モグリのものに比べると柄が長く、イソガネの反対側がヒシ（タコなどを突くための刺突具）になっているものも多い。海中を覗くためのハコメガネはやはりミヅキが用いるものとは異なり、携帯できるようにだいぶ小型になっている。形状の上で大きな違いは、ミヅキのハコメガネは舟上から海面に着けて水中を覗けるように、丈（顔に着ける部分から水面に付く部分まで）が長くなっているのに対して、イソドリのそれは自身が水中に入って使うため丈はごく短く、形状としては一眼の水中メガネに近いものとなっている（写真6）。

イソドリに行くときには、通常は上記の道具や獲物を入れるためのオケをひとつ持つのみである。イソドリして回るときにはオケを水面に浮かべて引いて歩く。また、タコを狙う場合は、カギを持つ人もいるし、テングサを搔いてまわる場合には1.5メートルほどの柄の付いたテングサカキ（プトカキ）を手に持ちショイビク（背負い籠）



を担いで行く（写真7）。また、ほとんど水中に入ることなく潮の引いたイソを回るときには、オケを持たずに普段着にショイビクを背負ってゆく人もいる。反対に、ハコメガネを使う場合には、イソドリは水に浸かりながらの作業となるため、ウェットスーツ（1970年代以降）のような水に濡れてもよい格好をする。

なお、前述のように、ワカメ、ヒジキ、テングサのクチアケの日は、大量に単一の海藻類を採るため、小型の舟を使うこともある（写真5）。イソドリで舟を使うのはこのときだけである。

以上のように、イソドリは、漁業というよりは日常生活の延長に位置づけられるものである。一方で、イソドリのスタイルは多様なものがあり、家からそのまま出かけてきたような格好のものから、舟を使うモグリやミヅキに近いようなものまでじつに幅広い。

### （3）アマとミヅキ・イソドリとの関係——磯漁地帯の生業戦略——

#### ①イソドリとミヅキの関係

モグリ（アマ）とイソドリ、またモグリ（アマ）とミヅキの関係を問う前に、まずはイソドリとミヅキの関係を整理しておく。

イソドリとミヅキとのかかわりを考える上で、海藻採取の位置づけは大きな問題となる。前述のごとく、テングサやヒジキ、ワカメ、カジメといった海藻は、イソドリでもまたミヅキでも採取されるからである。重量のかさむ海藻類の採取と運搬には舟があると便利である。とくにいちどきに大量に収穫できるクチアケ（口開け）の時には、イソドリであっても舟を使用することが多い。

そのため、舟を使うのがミヅキで、使わないのがイソドリという通常なされる区別は海藻採取に関しては当てはまらない。また、女性のみならず夫婦や家族全員でたずさわることが多いことを考えると、女性とともに男性労働力が海藻採取には重要な意味を持つことも特徴のひとつとなる。この点についても、ミヅキは男性、イソドリは女性が従事するといった男女分業による区別は海藻採取に関しては成り立たないことを示す。

そのように考えてゆくと、技術的にはミヅキとイソドリの中間的な類型として、海藻採取を設定することは可能だといえよう。ただし、海藻採取をミヅキやイソドリのようにひとつの漁撈類型として括る認識は住民にはない。むしろ海藻採取はクチアケが設定されることで、佐島の日常生活において、暦の折り目として意識され、ハレの日のような感覚を住民にもたらしていることにこそ意味がある。つまりイソドリという日常にハレの時空として海藻採取が設定されているといえる。

以上のように、イソドリとミヅキとの間には海藻採取の存在が示すように、実際の漁撈活動としては不分明な部分が多い、と同時にイソドリとミヅキの間に海藻採取を位置づけることで漁撈活動としては連続性の上に両者を捉えることが可能となる。

ただし、次章において詳述するが、生計上の位置づけは両者はまったく異なった方向性をもっている。それは、イソドリがあくまで自家消費を目的とした漁撈採集活動であるのに対して、ミヅキは金銭収入を目的としたいわゆる商売である。この点は、モグリとの関係も含め、後にあらためて三者関係の中で論じることにする。

## ②モグリとミヅキの関係——磯漁における稼ぎの戦略

佐島のような磯根地帯の海付きの村では、ショウバイ（商売：金銭収入）の基本はモグリとミヅキの組み合わせにある。

ミヅキとモグリとは、漁法としては対照的であるが、漁場として用いる空間はほぼ同じといってよい。漁獲対象も同様で、ともに第1に狙うのは商品価値のもっとも高いケー（アワビ）である。そのとき、モグリとミヅキとの間にイソドリを介して考えると、三者の間に緊密な関係性が読みとれることは後にあらためて論じる。

モグリは夏、ミヅキは秋から春というように時期を分けているため、ひとりの人がミヅキとモグリの両方に従事することが可能となる。また、家としても、イソドリは女性、ミヅキとモグリは男性というように、男女の分業により、やはりイソドリとモグリ・ミヅキとの両立が可能となる。

ミヅキの場合、舟上から人が操作する竿で獲物を狙うため、ホラ（穴）やタナシタ（棚下）に入っているアワビを採ることはできない。そのため、ノテング（野天貝）と呼ぶ岩上に出ているアワビを狙うことになる。ノテングは水深3尋（4.5-6メートル）以上のところに多い。また、ミヅキで採ることのできるアワビは、9割がマダカアワビで、メカイアワビは1割程度である。もっとも商品価値の高いクロアワビはごくまれにしか採ることはできない。それは、クロアワビが暗いところを好むためミヅキをおこなう日中はタナシタやホラの奥に入っているからである。それに対してマダカアワビはホラやタナシタのような暗いところよりも、タナの上などにノテングとしていることが多く、ミヅキで採るのに適している。

そうしたミヅキに対して、実際に海底に潜るモグリではタナシタが主たる狙い目となる。必然的にミヅキでは採ることのできない、また商品価値の最も高いクロアワビを多く採ることができる。

そうしたことからいえば、モグリはミヅキに比べると、アワビ採取に関しては有利で、かつ効率の良い漁であったといえる。しかし、前述のように、モグリはウエットスーツが登場するまではスコシと呼ぶ小さな褌を着ける以外は裸であるため、夏でも何時間も連続して潜ることはできなかった。当然、7月から9月中頃までのごく暑い時期2ヶ月半程度しかできなかった。しかも、そうした時期はネにはカジメなどの海藻が生い茂っており、ホラやタナの見通しは悪くなっている。また、素潜りのため1回の潜水時間は1分から1分半に限られる。そうしたことを考えれば、どんなに効率がよいといってもモグリでは相当数の取りこぼしがあったといってよい。

それに対して、ミヅキの場合には、モグリの残りの期間、つまり約10ヶ月間という長期にわたっておこなうことができる。かつまた11月くらいからカジメなどの海藻が枯れ始めるため海底は見通しがきくようになるという利点もある。

つまりモグリは短期間に相当量のクロアワビを集中的に採ることが可能な漁法であるのに対して、ミヅキは少しずつではあるが長期に渡ってマダカアワビを中心に採集することができる漁法である。その2つの漁撈を組み合わせることで、佐島のような磯根地帯の海付きの村ではショウバイ（商売：金銭収入）が成り立っていた。

あくまでショウバイの基本はモグリとミヅキの組み合わせにあるが、その合間を縫うように漁師個人の嗜好や適性に応じて一本釣りや磯立て網といった小規模で多様なショウバイもおこなわれている。それは佐島での暮らしが、基幹となるショウバイの中に、多様なショウバイを組み込むことで、

総体として維持されてきたことを示している。その場合、基幹となるショウバイは多くの漁師に共通するものであるのに対して、個別のショウバイは漁師の個性を反映したものとなっている。そうしたことは、基幹となるショウバイの中においても言え、ミヅキとモグリの配分バランスは、個人の嗜好や適性を反映して、人によりさまざまである。

### ③モグリとイソドリの関係——稼ぎと自給的生業の組み合わせ

本稿で扱うアマ（モグリ）はすべて男性である。しかし、用具という点でいえば、他地域の女性のアマと違いがあるわけではない。また、佐島でも、男性がおこなうモグリと女性のイソドリとは基本的には大きな違いはない。とくに、モグリのなかでももっとも浅いところでおこなわれるイソモグリはイソドリとは水中メガネを用いるかハコメガネを用いるかの違いしかない。しかも、イソドリのハコメガネはとくに小型化・軽量化されており、モグリの水中メガネと形態的・機能的に近いものになっている。つまり、用具に関していうと、イソドリとモグリは技術的には連続性の中に捉えられるもので、モグリだけを特殊視することはできない。

では、モグリとイソドリを分ける点は何かという、それは稼ぎと漁業権および従事者（性別）の問題に象徴される。モグリがショウバイ（商売）として現金収入に特化した漁であるのに対して、イソドリはあくまで自家消費を目的とするオカズトリの漁である。

この点は、漁業権の問題と深く関わってくる。つまり、金銭収入をもたらすモグリは漁業権なくしてはできないし、その意味で漁協の管理の下にある。それに対して、イソドリは前述のように漁業権を厳しく問われることはなく、むしろ家族に漁業権者がひとりでもいればその関係者ということで黙認されてきたものである。当然、その漁獲高や就業状況が漁協で把握されることはなく、そのためイソドリにどれだけの生産（個人また村全体でも）があるのかは行政を含めどこも把握していない。

さらにいえば、イソドリの場合は佐島の住人ならだれでもおこなうことが黙認されている。佐島地先は村の権利という意識があり、その住民には漁業者（漁業権者）またその家族であるかどうか<sup>(12)</sup>が問われることなく認められてきた漁であるといっていよい。

また、イソドリの従事者は家内において、「男性（漁業権者である一家の主人）＝モグリ・ミヅキ＝金銭収入目的」、「女性（漁業権者の妻や老親）＝イソドリ＝自家消費目的」、という性別による役割分担がはかられている。そうした役割分担は、技術的また体力的な特性によってなされたものではなく、ショウバイの方途として、つまり磯根地帯の海付きの村における生計維持戦略のひとつとなされたものである。

## 5. アマの位相

### (1) 磯漁のなかのアマ——アマ・ミヅキ・イソドリの関係から——

#### ①モグリ・ミヅキ・イソドリの三者関係

モグリ・ミヅキ・イソドリという主要な磯漁の関係について、これまでの検討をまとめると、ミヅキとイソドリの近縁性に比して、その両者とモグリとの間に大きな断絶を想定できるかのような印象を与えてしまうかもしれない。これまでのアマ（モグリ）に関する研究は、繰り返し述べてきている

表2 磯漁の対照

項目\漁法	モグリ	ミヅキ	イソドリ
従事者	男	男	女（老男）
漁 場	根（オキ-キワ）～磯	根（キワ）	磯
漁獲対象	アワビ（主）ほか	アワビ（主）ほか	磯物（全般）
漁業権	必要	必要	不要（慣行）
漁 法	管理（漁協登録）	管理（漁協登録）	非管理（慣行黙認）
漁 期	7-9 月	10-6 月（通年可）	通年（大潮）
同業者組合（仲間）	あり	あり	なし
生計上の意味	商売（現金収入）	商売（現金収入）	オカズトリ（自家消費）

\* モグリにもその中にオキモグリ・キワモグリ・イソモグリの区別がある。

\* ミヅキとイソドリとの中間に海藻採集がある。

\* 現在はモグリ仲間はひとつだが、1950 年代にはオキモグリとキワモグリは別の仲間であった。

表3 磯漁の漁場

海域・海底		漁法	モグリ	ミヅキ	イソドリ
オキ (沖)			×	×	×
	ネ (根) 12 ヒロ～		○ オキモグリ	×	×
キワ (際)			○ キワモグリ	○	×
	ネ (根) ～12 ヒロ イソ (磯) ～1 ヒロ		○ イソモグリ	△	○

ように、女性の関与および大深度の潜水ということにばかり視線がそそがれてきたため、アマは特殊なものとされ、必然的に他の磯漁（ミヅキやイソドリ）とは異なるものとして区別されてきた。そこには、アマが特殊な技能であるのに対して、ミヅキやイソドリは素朴な磯物採集にすぎないという意識がある。

しかし、モグリの中にもさまざまな類型が存在

し、大深度の潜水を伴うアマ漁いわゆるオキモグリはそのうちの一部に過ぎないことは先に示したとおりである。オキモグリに従事する人の数はキワモグリやイソモグリに比べるとはるかに少なく、またひとりの人の生活史の中でもオキモグリに従事するのは一時期に過ぎない。

アマの活動はイソ（磯）からオキのネ（根）にまで達するもので、磯漁のなかではもっとも広い領域に適応している。そのとき、オキモグリに関していえば、たしかにミヅキやイソドリとは一線を画し、それらでは適応できない大深度のところにまで進出している。しかし、その一方で、キワモグリについてみると、それはミヅキの活動領域と重なり、しかも同じ人が夏はモグリ、秋から春にかけてはミヅキというように時期を変えて両者に従事していることは生業の戦略としてむしろ一般的なことである。

また、イソモグリについていえば、イソドリとの違いは不分明で、その違いは詰まるところ自己認識（自意識）の問題であるといった方が適切である。なぜなら、表2・3・4に示すように、イソドリ<sup>(13)</sup>とイソモグリは獲物や道具、活動領域など漁のあり方はほぼ同じであるといっていよいからである。

そのように検討してみると、まさに自己認識および性差の問題として、イソを活動領域とする漁撈は弁別されているといっていよい。つまり、男性がイソでの漁撈に従事する場合はイソモグリであるという意識が強くはたらき、反対に女性の場合は佐島ではモグリには従事しないため、それはあくまでもイソドリにすぎないとされてしまう。

また、漁をめぐる空間認識に注目して両者の関係を見てみると、興味深い一致点がある。それは、イソドリはオカドリともいい、同様にイソモグリはオカモグリとも呼ばれていることである。つまりこれは佐島においてはイソとオカは転換可能な用語としてあり、かつ民俗空間としてもイソはオカに



分類されていることを示している。佐島の漁師にとって、イソはまさに水陸漸移帯として、水界でもありまた陸でもあるという両義的な空間である。それは、ハマ（浜）も同様で、佐島の場合、母屋からの延長として浜には小屋が建てられるとともに、海からの延長としてカグラサン（手動のウインチ）により船はハマに引き上げられる。

以上のように見てくると、モグリ・ミヅキ・イソドリの関係もやはりミヅキとイソドリの関係のように、連続性の中で捉えた方がよいことは明白であろう。むしろ磯漁の間の違いを強調し、断続した関係に捉えることは現実を反映したものとはなっていないし、従来の研究のようにモグリのみを特殊視することに繋がってしまう。

表4 磯漁の道具

漁法 項目	モグリ			ミヅキ	イソドリ
	オキモグリ	キワモグリ	イソモグリ		
(漁用具)					
舟	○ (サンマイハギ)	○ (サンマイハギ)	×	○ (ボウチョウ)	×
ショイビク	×	×	○	×	○
フンドン	○	×	×	×	×
ヒドコ	○	○	×	×	×
タル	×	○	○	×	×
オケ	×	×	△	×	○
スカリ	×	○	○	×	×
(漁具)					
ケーオコシ (アワビトリ)	○	○	△	×	×
ゾー	×	×	×	○	×
イソガネ (トコブシトリ)	×	○	○	×	○
サザエツキ	×	×	×	○	×
テングサカキ	×	×	×	○	○
カマ (海藻刈)	×	×	×	○	○
モリ・ヒシ・フシ	○	○	○	○	○
タマ (網)	×	×	×	○	×
(装身具)					
メガネ	○ (フウセン付き)	○	○	×	×
ハコメガネ	×	×	×	○	○ (イソドリ用小型)
スコシ (禪)	○	○	○	×	×
ポッタ (労働着)	△ (舟上)	△ (舟上)	△ (舟上)	○	○

## ②磯漁をめぐる生業の補完関係

表2をもとに、モグリとミヅキ・イソドリの関係を見てみると、相互に補完関係にあることが分かる。それはとくに労働面において顕著である。モグリとミヅキはともに壮年の男性が従事する。それに対して、イソドリは女性や隠居老人が主におこなう。つまり両者の関係は性および年齢による補完関係にある。

では、モグリとミヅキとの関係はどうかというと、これは前述のように、漁期が異なる。そのため、同じ壮年男性でも、7-9月にモグリ、10-6月にミヅキというように両立することが可能となる。また、漁期に関していうと、イソドリが通年でおこなわれることから、モグリ・ミヅキと労働が重複してしまうように見えるが、その点は前述のように男女分業（および老若分業）という性および年齢による棲み分けが可能となっている。

このようにみてくると、家を単位とすることで、モグリ、ミヅキ、イソドリは労働重複に陥ることなく組み合わせが可能となり、かつまた商売（現金収入）とオカズトリ（自家消費）の漁がやはり適度に組み合わせられることになる。その結果、総体として家の生計が家族労働により維持されるようになっていたといえよう。

また、本稿では詳しくは触れないが、こうしたいくつかの漁撈間に見られる補完関係は、漁撈とと

もに百姓漁師の生計維持には不可欠な要素となる農耕やイサバ（行商）活動を補完関係の要素に加えたときも成り立つ（安室，2011a）。それは女性（および隠居老人）労働力に頼ることの多い農耕と行商に対して、男性による漁撈という対比に象徴されるように、やはり性と年齢による補完関係が成り立っている。また、当然であるが、1年および1日の活動時間の中においても、農、漁、行商といった生業活動は主たる従事時間をやはり棲み分ける傾向にあり、そのことも補完関係の維持には重要な意味を持っている。

### ③磯漁の歴史展開に関する試論

表4をもとに道具の側面からあらためてモグリ・ミヅキ・イソドリという磯漁の関係を見てみる。イソドリとモグリにおいて用いられる貝類の搔爬具は、漁具の名称こそケーオコシとイソガネと異なるが、それらはみな基本的形状や機能は変わらない。また、ミヅキの道具であるゾーも、船上から海底までの距離が長いため、手の延長として長い柄が付いただけで、その先にある道具はやはりイソドリやモグリの道具と同じである。そうすると、漁具という面においても、先に検討したように、磯漁は相互に強い関連性を有していることが確認される。

イソドリからモグリへという展開が想定される根拠のひとつがそこにある。また、女性が他の地域ではモグリ漁に従事していることも、イソドリからモグリへの展開を示す根拠となる。この点についてはあらためて後述する。

用いられる道具の種類を見る限り、モグリ、ミヅキ、イソドリは基本的に同じ系統の漁撈活動であるといえる。技術的な難易度および身体的な負荷の度合いを指標にすると、通常、生業技術は身体的・技術的に低度なものから高度なものへとその幅を広げてゆく。そうすると、イソドリからミヅキ、またイソドリからモグリへという展開が想定されてよい。

実際、イソドリとモグリとの関係は、 $\text{イソドリ} \leq \text{イソモグリ} < \text{キワモグリ} < \text{オキモグリ}$ という順に難易度を漸増させる。そのことは、漁場が浅いところ（磯）から深いところ（根）へと移行するにしたがって、使用する道具はほとんど変わることがないまま、身体的な負荷の度合いと技術的な要求度は漸増することを示している。

また、イソドリとミヅキの関係についても、同様のことがいえ、技術の高度化がイソドリからミヅキへの展開には不可欠となる。直接に漁具を手にとって漁をおこなうイソドリに対して、ミヅキの場合にはやはり漁具自体はほとんど変わらないが、舟上での漁獲行動となるため、手の延長として漁具との間には長い柄が必要となり、その分だけ漁具の操作には技量が必要となる。さらにミヅキは揺れる舟上での作業となるため要求される難易度は増幅される。

また、三者間の相違点として考えられるものに、舟を用いるかどうかということがある。ミヅキには舟は必須であるが、イソドリには通常用いられない。また、モグリの場合には、オキモグリとキワモグリには舟はやはり必須であるが、イソモグリには用いられない。

しかし、そうした違いも、舟の機能に注目してみると、舟を用いないイソドリやイソモグリにはそれを補完するものが用意されていることが分かる。磯漁における舟の機能としては、漁獲物の保管・運搬とともに人の移動・休息が重要な意味を持つ。一見すると舟を用いない磯漁にもその機能を代替するものとして、イソドリにはオケ、イソモグリにはタルがあり、それぞれ採捕した魚介の保管・運

搬に用いられるし、イソモグリはタルに半身を載せることで洋上で休憩をしたり、そのまま泳ぐことで楽に移動したりすることができる。磯漁では舟・オケ・タルは同様の機能をもって使用されているといつてよい。

以上のように、モグリ、ミヅキ、イソドリの三者は基本的な漁具はほぼ共通しているが、その使い方には難易度に差が見られる。そして、その差として認められる点こそが三者をそれぞれ特徴づけるものとなっている。また、道具における三者の違いとして認められるもの（たとえば、舟、オケ、タル）は機能としては同じものである。そうした三者の関係は密であり、技術を指標とするなら、イソドリを起点にミヅキやモグリに展開していったと考えることができる。

道具のレパートリーは3つの漁法ともほぼ共通するものがある一方で、それを分ける特徴的な漁具が存在することにも注意を払う必要がある。そうした特徴的な漁具が強調される時は、とくに自意識の表明である場合が多いからである。たとえば、モグリにおいては、フンドン（分銅）とタルはそれぞれフンドンモグリとタルモグリという類型に直結する。また、使用する舟をみた場合には、モグリに用いるサンマイハギやベカブネは磯回りの一般的な小舟を指すが、それがボウチョウということになるとミヅキ専用の舟とされる。さらには、ミヅキ漁のこと自体をボウチョウということもあり、そのことは舟の種類がミヅキ漁の別称としても機能していることを示す。こうした点は、特徴的な漁具や道具がその漁に従事する人たちの自意識（他者との区別意識）と強く結びついていることを示している。

## (2) アマと性——「海女」誕生に関する試論——

### ① アマ漁は女性の特殊技能か

アマ、ミヅキ、イソドリにはそれぞれ漁を特徴づける技術があるが、そうした技術のうちアマに関するものだけがとくに特出したものと見なされる理由はない。一見するとオキモグリのよう大深度の潜水は特殊な技能にみえるが、それは浅いところから段階的に到達されたものであり、なによりアマ漁全体の中ではごく一部に過ぎない。また、その従事者も一生のうちでごく短い期間しかおこなっていない場合が多い。

つまり、アマ漁を磯漁全体の中に位置づけるなら、これまでイソドリやミヅキについては素朴な磯物採集として技術的にアマとは一線を画すことが多かったが、むしろイソドリやミヅキとの連続性の中に捉える方が実態を反映している。アマだけ特別視するのは女性に関与することによる一種の偏見でさえある。アマはけっして特殊な技能を持った女性による漁撈ではない。

たとえ海女の村であっても潜水技術の習得は嫁入り後であるところが多い（竹内，2002）。また、結婚してはじめてアマ漁に従事したとする女性も多い。一般に漁村は農村に比べ通婚圏が広く、必ずしも海女の村から海女の村へと女性が嫁入りするわけではない。さらにいうと、海女地帯にあっても、女性が必ずしも海女になったわけではない。たとえば、福井県三国町安島では、女性が担う仕事には、海女のほかに、魚介類の行商、工事人負、女中などがあり、そうしたなかから自分の嗜好や適性をみたくて決められており、けっして海女が家業として母親から娘また姑から嫁へと受け継がれているわけではない（竹内，2002）。

そうしたことを考えると、潜水などアマの特殊な技能とされてきたものは、先天的に備わった特殊

な身体能力によるものではなく、後天的に経験知として獲得されるものである。そして、それは男性か女性かにかかわらず、一世代のうちに、浅いところから深いところへというように活動領域が拡大する中で段階的に獲得されるものである。

アマは日本文化の起源に関わる特殊な技能を伴った女性による漁撈という前提からいったん離れてみると、佐島の場合、モグリ（アマ）・ミヅキ・イソドリといった磯漁の間には相違点よりもむしろ共通性が多くあることに気づく。モグリのうちでもっとも浅い水域でおこなわれるイソモグリは、まさにイソを漁場とするイソドリと、利用する水域はもちろんのこと、身体的な負荷の度合いや道具など技術的な側面はほとんど変わらない。両者を分けるのは、身体的・技術的な側面ではなく、生計活動としての意味（商売か自家消費か）、従事者（男性か女性か）、そして漁業権（必要か不要か）といった社会的・経済的側面である。<sup>(14)</sup>

## ②海女と海士の関係

アマを含む磯漁に女性に関与することは特別なことではない。繰り返すが、まずは女性のアマだけを取り上げて、その技術を特殊なものとする前提から離れるべきである。女性が主たる漁業者となることが研究者の目を引いたことは事実であり、それが日本文化の起源や古代のロマンと安易に結びつけられる要因のひとつとなったことは間違いない。

その一方、日本の場合、遠洋漁業や沖合漁業はもとより沿岸漁業においても、漁業者は男性が主である中であって、なぜ裸潜水漁だけは男性とともに女性が主たる漁業者になりえたのか、という疑問がわく。

従来、日本列島におけるアマの地理的な分布をもとに、女性がアマ漁をおこなうようになった理由が説明されてきた。それには大きく分けて技術的・身体的な要因と社会的・経済的な要因という2つの流れがある。

身体的・技術的な側面からの説明としては、女性の外的環境への適応の高さに注目するものがある。代表的な例を挙げると、形質人類学者の香原志勢は、韓国済州島から鐘崎（福岡県）、伊勢・志摩（三重県）、御宿（千葉県）を結ぶ線を境にして、それより北に海女、南に海士が分布するとした。その理由として女性は皮下脂肪が厚く低水温に対する適応性が高いことを挙げている（香原，1975）。しかし、そうした説明からは東北地方に存在する海士の分布は度外視されており、現状のアマ分布を説明することはできない。また、上記の説明では女性がアマ漁をおこなうようになったことの理由とはならない。

それに対して、社会的・経済的な側面に注目したものとしては、漁業の歴史的展開や社会的分業体制の進展と関連させて説明するものが多くみられる。たとえば、桜田勝徳はアマの分布において、中国・四国地方や東北地方に海女が多く、中央日本に海士が少ないのは、漁業技術の進歩が早い後者の地域では別の漁業に男が吸収されていったからであるとした（桜田，1980）。また、小田耕三は桜田の見解を敷衍させ、日本列島には本来は海士が多かったが、江戸時代以降は沿岸漁業の発達でクジラ猟やマグロ・カツオ漁、イワシ網に海士が移行していったため、相対的に海女の割合が高くなったという見解を示している（小田，2005）。

さらに河岡武春は、日本列島にはもとは海女とともに海士も多くいたが、歴史展開の中で海女に特



化していったとした。そして、そのことを前提としつつ、アマの村と捕鯨の村との分布的重なりを根拠にひとつの推論をする。それは、アマの村において男性が捕鯨業に多く従事するようになったことにより、アマが海女に特化し、結果として男女の分業化が進んだとするものである（河岡，1987）。

桜田らの見解は、海女が分化する要因となったことの当否はおくとして、海女が目立つようになったのは古代にまで遡るようなものではなく、ずっと後の社会的・経済的な状況が影響してのことであることを示しており一定の説得力を持つ。

ただし、こうした見解にも問題がある。それはこれまで繰り返し述べてきたように、やはり海女を特別な存在として見ることである。そのため、どうしても海女の分布に目を奪われ、それをいかに解釈するかという点に研究が収斂してしまっている。

そこで、本稿ではひとまずアマに関して、海士と海女とを区別することを止めてみる。従来の研究は、海女の村といった場合、そこでアマ漁をおこなう人はすべてが女性であるかのように扱われてきたが、実態は決してそうではない。そのとき、アマ漁に男性も女性も従事する村があることにもっと積極的な意味を見いだすべきであろう。磯漁の歴史的展開として、イソドリのような磯物採集の延長にアマを位置づけるとき、その考え方は重要となる。

これまでに男女ともにアマ漁をおこなう地域が存在することは報告されているが、その意味が問われることはなかった。それは、前記のように海女の村に多くの視線が注がれてきたがため、海士の村とともに、またそれ以上に、そして意図的に、その存在が無視されてきたためである。

そうしたとき、海士と海女が並存する地域における煎本孝の研究は注目に値する（煎本，1977）。煎本は房総半島（千葉県千倉町川口）をフィールドに、アマ漁師の個体追跡により、アマ漁に利用する空間について海士と海女との違いを定量的に明らかにしている。それによると、海女は、海岸から350メートル、水深は3-5メートルまでの水域で漁をおこない、利用面積は0.3平方キロメートルであるとした。それに対して、海士は、海岸から950メートル、水深は5-20メートルの水域で漁をし、利用する面積は0.8平方キロメートルであった。あきらかに、海女は海士よりも岸に近い空間を利用していることが分かる。

上記の数値を、本稿で主なフィールドとした佐島に当てはめてみると、水深3-5メートルの海域利用はキワモグリ、水深5-20メートルの利用はオキモグリにほぼ相当している。また、佐島ではキワモグリ、オキモグリとも男性の仕事となっているが、川口ではキワモグリの部分を女性が受け持っていることがわかる。そのとき、イソドリとして水深2メートル程度までの磯における漁撈採集活動をおこなうのは、佐島では女性であったこと、さらにその水域は男性のおこなうイソモグリと重複し、かつ使用する漁具や技術もほぼ同様のものであったことに注目したい。

つまり、川口ではオキモグリは男性、キワモグリ以下が女性の領域となるのに対して、佐島ではオキモグリ・キワモグリまでが男性でそれ以下が女性の領域になっている。このとき女性のおこなうイソドリと男性のイソモグリとの関係に注目しなくてはならない。イソモグリとイソドリの類似性は前述の通りである。そこに注目すると、佐島にはたしかに女性のモグリは存在しないが、イソドリという実質的にはイソモグリと同等の漁撈採集活動がおこなわれており、その意味で川口と同様に佐島においても沿岸域利用について男女による棲み分けがなされていることがわかる。見方を変えると、女性が漁撈採集活動のためにキワにまで進出したのが川口であるのに対して、佐島ではイソにとどまっ

たということになる。

### ③アマの歴史展開と「海女」の誕生

これまでの検討をもとに、以下では、モグリ（アマ）の歴史展開およびそれに対する女性の関与について、ひとつの仮説を提出し本稿のまとめとする。

まず、モグリの歴史展開をまとめると、以下の3段階に推移したと想定される。第1段階としてイソモグリがあり、第2段階としてイソモグリ+キワモグリとなり、そして第3段階としてイソモグリ+キワモグリ+オキモグリとなる。つまり、モグリが現在のように磯のごく浅いところから水深20メートルを超すところまでの広い領域にわたって活動するようになったのは、浅場から深場へと順に漁場を拡大した結果であり、キワモグリが他の磯漁（ミヅキやイソドリ）とは競合しない深度の水域にまで進出することで、キワモグリそしてオキモグリとモグリのバリエーションを増していったからである。

次に、他の磯漁も含めて検討するなら、第1段階においては、イソモグリは現在のようにモグリの1類型として社会的・経済的な意味で他の磯漁と区別されるような状況ではなく、むしろイソドリと未分化の漁撈採集活動であったと考えられる。その状況においては男女ともイソにおいて漁撈採集に従事していたと想定される。そして、第2段階は、イソからキワのネに漁場が拡大する中、第1段階に想定した漁撈採集活動からキワモグリとミヅキが分化していったと考える。そのとき第1段階との違いは、舟が漁撈採集に用いられるようになったことである。そして、第3段階は、モグリ・ミヅキ・イソドリという磯漁のなかにあって、唯一モグリだけがオキモグリというかたちで沖のネにまで進出していったと考える。

そうしたモグリおよび磯漁の歴史展開の中で、当該地域における社会的・経済的な状況を反映して、アマ漁に女性が従事するところとそうでないところが生まれていったと考えられる。そのときイソの利用およびその位置づけが要点となる。それをモグリ（アマ）の範疇と位置づけるか、イソドリのような磯物採集とするかが、「海女」を誕生させる社会かどうかの分岐点となったといえよう。

本来、第1段階では男女ともイソにおいて磯物採集（イソドリとイソモグリの未分化状態）をおこなっていたものが、第2段階、第3段階へと進むとき、女性が磯物採集の延長としてキワモグリやオキモグリにも進出していった地域が現在の女性アマ（海女）の分布地となったと考えられる。それに対して、社会的・経済的に女性労働が自家消費を目的とした活動へ、男性労働が金銭収入を目的とした活動へという性差による分業化が強く意識されたところでは、自給的な意味合いの強いイソドリは女性が担い、金銭収入活動を主目的とするモグリやミヅキは男性が担うようになったと考えられる。なお、女性アマ地帯および女性アマ・男性アマ混合地帯においても、男性アマ地帯と同様に、自給的な農耕は女性労働により担われることが多いのは、家事労働と同様に、自給的な生業は女性により担われるという考えが根本にあるためであるといえよう。

そのとき、そうした分岐の動きに拍車をかけたものとして海への信仰がある。海の神を女神とし、舟に女性が乗ることを忌む信仰が、第2、第3段階（ともに舟を利用する必要がある）へと磯漁の領域が広がるとき、女性の漁撈採集活動を第1段階に留めるものとして機能した。反対にいえば、女性の乗船を忌避する観念が流布する中、女性のアマが分布する地域ではあくまで舟を管理運航する船頭

やトモロシの役目は男性がつとめること、および女性のアマ漁はイソドリからの延長であるという意識を強く残存させることで、女性のアマは可能となったと想定する。<sup>(15)</sup>

また、海の信仰とともに、上記のような歴史展開をたどる中、本稿の冒頭において指摘したように、「海女」が近世期にはすでに文化資源化され、一種の性的なまなざしを許容する見世物とされたことも、触媒として作用し、女性の裸潜水漁を増加させた要因になったといえる。

## 注

- (1) 裸での潜水を伴うことから、南西諸島に見られる追い込み網漁をアマの一類型とする考えもある（たとえば、小田，2005）。ただし本稿ではあくまでそれは網漁の一形態と捉え、アマとは扱わない。また、空気を船上から送るいわゆる機械潜水はアマ漁の展開型として位置づけられるが、本稿の時間軸を1950年代の高度成長期の前にしているため、やはり除外する。
- (2) 一般には海女は日本列島と朝鮮半島にしか存在しないとされるが、裸潜水漁自体は世界中に存在する人類文化に共通する漁撈形態である。
- (3) 「観光海女」にいち早く注目し研究対象としたのは宮本常一である（宮本，1978）。民俗の文化資源化に関する先駆的な業績として評価されなくてはならない。
- (4) 最近も桜田勝徳や宮本常一の論を引きながら日本民俗の「海洋民性」について論じられている（たとえば、野地，2009）。しかし、そうした研究の多くは生計維持という視点を欠いたもので、海女を取り上げて古代のロマンを語るに等しい議論といわざるをえない。
- (5) 歴史分野の研究動向とは別に、少数ではあるが前記のような立場をとらない研究もある。たとえば、秋道智彌は生態人類学的視点に立って、日本のアマ（海人）はオセアニアを中心に太平洋の島々に暮らすアマの一員という視点を持つべきであるとしている（秋道，1988）。秋道のアマ研究は「日本文化の源流問題に関わる倭の水人や、古代から現代にいたるまで脈々とひきつがれてきた日本の海人の伝統」とは一線を画すものであり、本稿も基本的にそうした捉え方を支持する。
- (6) 図2では便宜的に陸と海の生業空間を村を中心において同心円構造として描いている。しかし、それは海と山の空間が村を円形に取り巻いているという意味ではなく、あくまで村からの距離つまり遠近によって生業空間が変わることを意味するものである。とくに海の生業空間は本来は水平的な広がりをもつもので、海岸線からの距離に対応した水深により生業空間が変化してゆく。
- (7) いわゆる漁村とされる佐島も、横須賀（10 km 圏）、横浜（25 km 圏）、東京（40 km 圏）といった大都市に近接するため、交通網の整備やモータリゼーションが一気に進んだ高度経済成長期以後はマリナーなどのリゾート開発や大規模な住宅開発が進んでおり、村落としての景観は大きく変貌した。農林水産省の漁業センサス調査（第10次，1998年実施）では、佐島は第2種漁港を有する漁業集落と認められるが、総世帯数575戸（1997年統計）のうち漁業世帯は135戸で、漁家割合は24パーセント弱に過ぎない。
- (8) ウエットスーツの導入は佐島の磯漁に大きな影響をもたらした。裸潜りの時には身体的な面でモグリの時間を大きく制約していたが、ウエットスーツが導入されるとオキモグリでも1日に通算すると100回以上も潜ることが可能になった。また、キワモグリとはいっても15メートルくらいは楽に潜れるようになった。そのため、ウエットスーツ導入の年だけで大量のアワビが採られてしまい、資源の枯渇が大問題となった。それは、モグリの問題にとどまらず、秋から春にかけておこなわれるミヅキにも大きな影響を与えた。裸潜りの時にはミヅキのシーズンまで資源が十分に持ち越されており、モグリとミヅキとの均衡関係が保たれていたが、モグリによる資源の収奪が激しくなったことで、ミヅキの漁獲が激減した。それをきっかけとして漁協により資源回復を期してアワビ稚貝の放流がなされるようになった。
- (9) モグリの家では、ヒドコ（火床）の火種となるマツを山から伐ってくるのは女性とくに嫁の仕事とされた。またマツの薪作りはおもに子どもの仕事とされた。モグリ漁に出ると1日に薪を1把使う。1シーズン

- に 50 日間の漁に出るとすると 50 把の薪が必要となり、女性にとってはマキキリは相当の労働となる。
- (10) イソモグリとオカモグリは同義であるので、以下ではすべてイソモグリと表記する。
- (11) 全国的にみると、アマはタル・フンドン・舟・トモロシのほかにも命綱や碇の有無といったことによっても類別化される（田辺，1990）。
- (12) 高度成長期以降に移り住んできた新住民は除外されるが、旧村部の住人なら大工であれ商店主であれ漁協の組合員ではないけれどもイソドリをおこなっている。
- (13) 唯一、道具としては水中メガネについてのみ明確な違いが存在する。つまり水中メガネを使って漁をおこなうのがイソモグリであり、使ってはならないとされるのがイソドリである。しかし、だからといって、イソドリに潜水が禁じられているわけではない。まずハコメガネで獲物を見つけておいてから、素目で水中に潜り採集することはイソドリでは一般的な採集技術となっている。また、ガラス製の水中メガネが用いられるようになる明治前期（1890 年頃）以前はモグリでも素目が一般的であった。そう考えていくとイソドリとイソモグリとは道具においても明確な差は認められないことになる。
- (14) 社会的・経済的な側面でいえば、海女の分布を母系制と重ねて解釈する議論もある。例えば、田辺悟（田辺，1990）は、海女を母系制、海士を父系制、男女ともに潜水漁に携わるものを双系制として類型化している。しかし、この問題については十分な根拠が示されないまま、日本人の起源論と呼応するかたちで論じられているに過ぎない。民俗調査報告書等で見える限り、日本の場合、海女地域が母系制の社会であるという積極的な証拠は見あたらない。
- (15) 海付きの村では、一般に男は海、女は陸という分担がある。そうした海付きの村において、イソドリの延長として女性がアマ漁に従事するようになったということは、性差に基づく役割分担の意識が強い社会だからこその現象であるといえる。一般に農村社会では海付きの村ほど生業に性差が認められないのは、漁撈という生業が性による役割分担を助長するものであったと考えることができよう。

#### 引用参考文献

- 朝日新聞 2010 「海の生態系―海士の幸を残したい―」10月16日（朝刊）社説
- 青山孝慈 1987 「相模国三浦郡の村明細帳（二）その1」『三浦古文化』42号
- 秋道智彌 1988 『海人の民族学』日本放送出版協会
- 磯本宏紀 2006 『企画展示図録 海人の見た世界』徳島県立博物館
- 煎本 孝 1977 「房州海士・海女の潜水採集活動」『人類学講座 12 巻―生態―』雄山閣出版
- 大林太良 1990 『東と西 海と山』小学館
- 小田耕三 2005 「南九州・沖縄の海士の現況と類型」『史泉』102号
- 香原志勢 1975 『人類生物学入門』中央公論社
- 神奈川県教育庁指導部文化財保護課編 1971 『相模湾漁撈習俗調査報告書』神奈川県教育委員会
- 河岡武春 1987 『海の民』平凡社
- 川喜田二郎 1987 『素朴と文明』講談社
- カール・サウアー 1960 『農耕の起源』（竹内常行・斉藤晃吉共訳）古今書院
- 木暮修三 2009 「海女の表象」『日本研究』39号
- 桜田勝徳 1980 「男の潜水漁のこと」『桜田勝徳著作集 3』名著出版
- 瀬川清子 1970 『海女』未来社
- 高桑守史 1984 「伝統的漁民の類型化に向けて」『国立歴史民俗博物館研究報告』4集
- 竹内由紀子 2002 「沿岸地域的女性労働」田中宣一・小島孝夫編『海の島のくらし』雄山閣
- 田辺 悟 1990 『日本蜃人伝説の研究』法政大学出版局
- 野口武徳 1987 『漂海民の人類学』弘文堂
- 野地恒有 2009 『漁民の世界』講談社



- 宮本常一 1964 『海に生きる人びと』 未来社
- 宮本常一 1978 「海人ものがたり」 中村由信『日本の海女』 マリン企画（『日本民俗文化資料集成 第4巻 海女と海士』所収, 三一書房, 1990）
- 安室 知 2008 「海付きの村に生きる」『日本の民俗 1—海と里—』 吉川弘文館
- 安室 知 2011a 「『百姓漁師』という生き方」『国立歴史民俗博物館研究報告』162集
- 安室 知 2011b 「『百姓漁師』と『漁師百姓』」『国立歴史民俗博物館研究報告』162集
- 李 善愛 2008 「近代化と対馬海流域アマ（海士・海女）の漁業戦略」『宮崎公立大学人文学部紀要』15巻1号
- 李 善愛 2009 「日本東北地域アマ（海女・海士）の水産資源利用形態（1）」『宮崎公立大学人文学部紀要』17巻1号